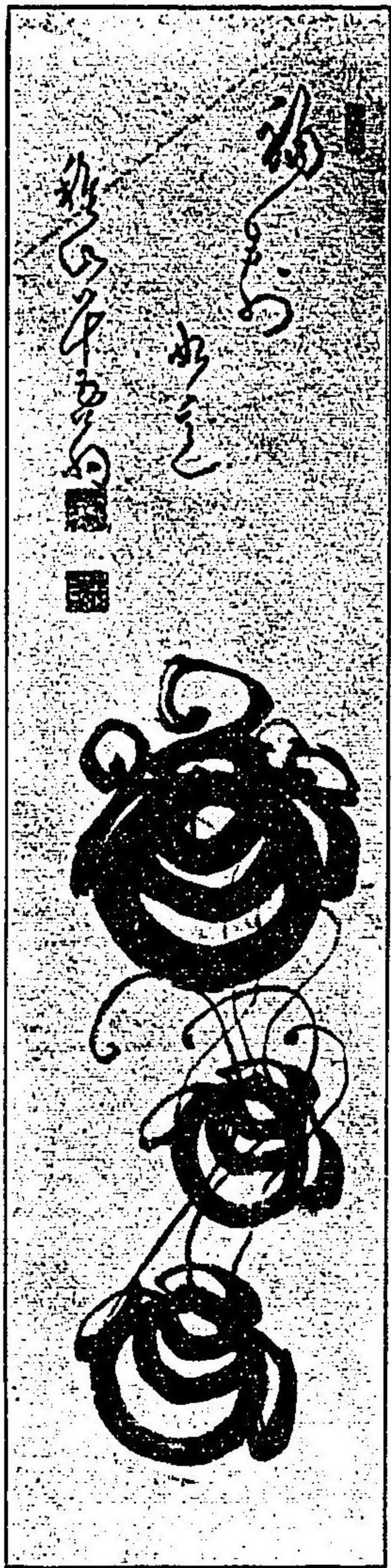


49
546

西有禪話

✓





福所氏村今



福所氏明見井橋

79-545



はしがき

通る明治三十四年三月十五日宗門末派多数の興望を擔ふて
 我輩本山執持寺獨住第三世の席を董されたる勲賜直心
 師國師四有松山老師は本年二月二十五日其齡八十有五前
 途春秋衰しきの故を以て御退隱の儀を公表せられぬ是より
 先々余輩々宗義を左右に拜問するの榮を得其の垂誨に接し
 其の訓求を蒙ること、特かに拜録して、以て行道の指針とな
 せり。茲に添ゆるに「三松稿」を以てし、編して一卷となし、これ
 を江湖に捧ぐ。これ案より大海の一滴たるに過ぎずと雖も、い
 へば、御退隱の紀念たらしめんが爲めなり、其の不備の
 如きは、余の庸劣の致す所なれば、看客請ふ余の意を諒し
 て深く咎め給ひり。

明治三十八年三月十五日

見明拜識

明治
 28 4 13
 内交

目次

○△四有程山禪師小傳……………一
 ○△四有程山禪師經歷談……………一
 ▲垂睡……………一八
 △其一……………一八
 △其二……………二九
 △其三……………三四
 △其四……………四三
 ○△洞上信徒安心談……………五〇
 ○△禪床閑話……………六〇
 ○△三松稿……………七八

例言

一、本書は、禪師が近年各處に於て垂睡あらせられたる法語を編輯したるものにして、殊に某師の好意によりて、三松稿を添ゆることを得たるは編者の甚だ光榮とする所なり、
 一、其經歷談は過る三十年九月廿六日法弟等相謀りて駒郊の諏訪山に暮字の鐘を張りしとき、禪師より拜聴したるものを尙かに筆録したるものなり、
 一、其垂睡は或は大學生或は高等學林、若くは戒會等に於ける禪師の垂示をば、二三子及び余が拜記したるものなり、
 一、禪床閑話はこれまた二三子及び余に對し、訓誡せられたるものを肥述したるものなり、
 一、如上の理由なるが故に、其備はらざると、其疏さむとは何れも余の罪過と知るべきなり、
 一、老嫗親切、言外に響なきにあらず、本書を見ん人、區々文字に拘泥することなく、眼光紙背に透徹する底の覺悟あらんことを要す、
 明治三十八年春彼岸前二日 編者 識す

真心淨國禪師小傳

禪師諱は瑾英、穆山と號す、可翁、無爲庵、並に有安老人は皆其別稱なり、俗姓は笹本氏、文政四年十月二十三日を以て陸奥國三戸郡濱通湊村に生る、天資英邁、年甫めて九歳、母に隨ふて、八戸村眞宗願榮寺に詣し、一席の法談を聞き、因みに地獄極樂の畫像を見て、坐ろに出離の念を兆し、遂に父母に請ふて、其香華院たる類家村長龍寺金龍和尚の室に入りて得度す、これ實に天保四年六月二十有一日なり

翌五年、金龍和尚喬遷の事あり、禪師亦隨つて法光寺に入り、工夫勉強道殆ど十星霜、禪師十九歳、金龍和尚退隱の故を以て仙臺に赴き、錫を松音寺悅音和尚の下に掛け、居ると三歳、禪師二十一歳、江戸に上り、駒込吉祥寺學寮に遊びて、つぶさに螢雪の苦を嘗む、二十二歳立職の事あり、翌天保十四年八月、本然泰禪和尚の室に入りて嗣法し、

二十三歳にして牛込鳳林寺に住じ、二十五歳加州大乘寺の大夏解に出會し、其秋江戸に販り、愚禪和尚に參ずる年あり、二十九歳和尚を請して自坊に大法輪を轉じ、三十歳鳳林を辭し、相州海藏寺月潭老人に參じ、苦學力行十有二年、一日楞嚴經を繙閱し、頓に省悟する所あり、偶々高祖大師六百回大遠忌に際して祖山に登り、靈堂禪師に隨伴して關東に下り、上州龍海院に居ること二夏、更に去りて駿東如來寺に安居す、禪師三十八歳、相州英潮院の請に應じて赴き住し、月潭老人に參ずること舊の如し、在院五年、四十二歳にして宗參寺に轉じ、越て三年、月潭老人病の故を以て代つて甲州福昌寺に助化し、戒師となる、當時討幕の議旺んに謀議百出、法運亦丕塞す、茲に於てか護法用心集、山陰閑話の著あり、以て時弊を救ふ、明治四年五十一歳にして上州鳳仙寺に轉じ、翌年三月、教部省の召に應じて上京し、中講義に補せられ、尋いて大講義に轉じ、十月、宗内能試験者の

大任を授けられ、六年一月、禪三派より選れて大教院議員となる、法服廢止、俗衣着用の院議を翻したるは全く禪師の力なりとす、三月大學八大教區末派寺院説諭、教法調査を命ぜられ、並に神佛道各派管長の依囑を受けて、宗教調査の大任を托せらる、同四月、權少教正に補せられ、兩本山代理を命ぜられ、九月、北海道巡教を拜し、翌年少教正に任じ、八年北海道に入る、
時の北海道開拓使判官松本十郎、禪師の高風を迎慕し、一萬餘坪の地を給し、一字を建立す、今の中央寺これなり、同六年、中教正に轉じ、十一月、大本山大會議員となり、環溪禪師を補佐して、宗綱を統攬あらせられ、翌年七月、鸞輿北に幸じ、青森行在所に拜謁の榮を賜ふ、十年四月、本校教師を囑托せられ、幾干ならずして、遠州可睡の請を容れて轉住し、十一年十月、再び天機を掛川行在所に伺ひ奉り、十二年、静岡縣第二號教導取締を命ぜらる、十四年一月、禪師大に風紀の廢

頽を憂て敲唱會なるものを組織し同年再び選れて本山大會議々員となり、衆に推されて議長の榮職に選れしも固辭して受けず、禪師、教學の不振を慨嘆せられて萬松學校を創立せられたるは實に此歳なりき、永平環溪禪師其徳を偉なりとし賜ふに高祖の靈骨三顆を以てす、十六年二月十一日權大教正に任じ十九年二月永平寺西堂となり、黃緋直綴の被着を許さる、西堂は終身職賜ふに生涯の俸給を以てし同時に時處を選ばず宗内僧侶の叢林行脚證明狀點檢の特權を授けらる、二十五年日置默仙師を後繼として可睡を退き、島田町傳心寺に隱棲し三十年夏淺草永見寺の初會を助化し、尋て湊村に一字を建立せられ同年九月有志の發起に依り喜壽の賀筵を駒込吉祥寺に開く、三十一年秋相州成願寺結制より皈つて病あり三閏月の後癒ゆ、時人呼んで佛天の加護となす、三十三年、禪師年八十、其高德を慕へる横濱の檀信徒禪師のために一字を建立し

名けて西有寺と云ふ、
明治三十四年春末派の公選に依り大本山總持寺獨住第三世の席を董さる、同年六月十九日 勅して直心淨國禪師と賜ふ、爾來星霜周ること四回、禪師歳八十有五、
前途春秋相貧しきの故を以て御棲遲の念、堅牢にあらせられ、終に内外の懇請も御聽許せられず、三十八年二月二十五日を以て斷然御退隱の事を公表せられたり、然れども鑿鑿として猶衝天の志氣あり、今後の宗門は實に禪師に待つ所あるや多し、余等誠心誠意、法身益々御健祥にわたらせられん事、これのみ拜願の至りに堪へざるところ也。



西有禪

經

話

談

古來人の生涯は棺を蓋ふて定まると云ふことであるが、縦令棺を蓋ふにいたらずも自己の行履に就て、既往の経過を顧み去れば、大概の評價は出来るものぢや、人生自己が生涯を顧みて其事歴を回想し來ると種々無量の感想が起るもので、即ち若年頃には可なり學問もしたやうに思はれ、何か事業をも成し遂げた様にも思はれ、さては事業のために盡力したやうにも思はれ、其學問事業の結果として相應に功績もあつたらしく思はれるが、拙者などは今となりて篤と我生涯を追想するに、何一ツとして功績の認むべきものとは無い、これはたゞ余一人のみと云ふ譯でもあるまい、世間大概の人々はみなこんなものであらうよ、誰れでも一寸考へると随分國家に對しても功勞があつたらしく、國民の公益をも謀つたらしく、其他種々と自分勝手の算用から都合のよい感想を浮べるのであるが、さて然らば、退いて生涯の悪事、不正等を精算し、善惡邪正の差引勘定をつけたならば、功績の帳尻はなくて、ツマリ無功の精算をみるのであらう、人間一生の事を回想すると實に數かはしきものではないか。

余はまた若年の頃から、何か一つ天下に功績を遺したいと思ふて居たし、壯年時代には少々は功績もあつたやうに思はれたのであるが、今に及んで何が功績であると尋ねて見ると、まことにはやななさけなくも少しも功績として認むべきものがなく、結局善惡邪正の差引によりて、無功無能の無駄算用となつて居るから、今更自分の経歴などを話せと責められても、實は語るべきこともなく、たゞ慚愧の二字、この二文字が余の生涯の経歴であると云ふより外はないが、併し今日まで長命であつたから経歴した話すと云ふよりも、経歴された話が少々はあるから、茲に一席の坐談を試みることにいたした、勿論、大概の人は経歴したのでなく、経歴せられる方が多いものだらうと思ふ、まあ皆の衆そのつもりで聞いて貰はらう。

實はサ余も近來追々老衰して來たから自然に往年の英氣も消磨して別に何も求むる所がないから、何か一つ死後に残して置きたいと思ふて考へて居つたのぢや、所が今言ふ通り功績もなければ抱負もないので何も死後に止める者が無い、是までに社會の義務とか宗教上の事とかを勤めたのも、實は勤めたのでなく勤めさせられたので、其後から見たら覺束なく浮雲ものであつたに相違ない、ソシテ今日では最早死を待つより外に何もないから、一つ生存中に、棺桶を造つて自分の適意な詩歌でも咏じて、手習旁々之を其の中に

書き付けて置かうと思ふのぢや、然るに前申す如く余に求むるものがあつて余の経歴を話せとの事であるから、生存中の葬式を兼ねて懺悔話をするこゝしやう、ガカラ聴くものも葬式に會葬した積りて聴かねばならぬぢや。

余が経歴の一斑といふた所で別段の話しもない、ツマリ貧乏、雲水の乞食、経歴に過ぎぬのぢや、余の郷里は奥州の僻地であつて、父は今より四十八年前に歿せられ、母は八十六歳にて明治十七年に黄泉に赴かれたのぢや、父は禪宗の檀家、母の實家は真宗の門徒であつたから、余が幼少の頃は母に伴はれて其菩提寺へ屢々參詣したのである、其參詣の度毎に余の心に感じたのは、御堂に掛つて居る地獄極樂の圖、極樂の圖に對すると愉快に思ひ、ドイカ極樂に往生したいと思つた、又地獄の圖を見ては、劍樹刀山の恐しき状態に畏れたものである、或時余は母に問ふたのである、私は地獄へ行きますか、極樂へ行きますかと、母は笑つて汝の様に兩親の教をも守らず惡戯に耽つて居るものは地獄へ落ちるのぢやと答へたから、余は重ねてソレデは母上は地獄極樂の何れへ行かれますかと問たら、母は何か思はしげな様子であつたが、母も亦汝と同じく地獄へ往くのぢや、親と云ふものは子供の爲めに種々様々の罪を作るから、逆も極樂へは行かれぬ、子供等の爲めに地獄に落ちるのも仕方がないと云はれたから、余はナゼ極樂へは往かれぬのであると再び問ふた、スルト

母は娑婆の衆生が地獄へ落ちるのは雨の降る様なもので極樂へ往生するものは雨夜の星よりも少ない殊に女親は子供等の爲めに罪を多く作るのて喧嘩をしても泣いても笑つても子供の爲めに罪を作るから極樂往生は逆も出来ぬのであると答へた此時に何となく妙な感じが起つて何とかして極樂へ往生したい又父や母をも極樂に往生させたいと思つたソコで余は更に問ふたのである如何なることをしたものが極樂へ往くかと母は何と思つたか出家をして眞實に佛道の修行をすれば極樂へ行かれるのである出家した當人ばかりでなく一人出家の功德によつて九族までも天上に生ずと教へられたのである此時は余が恰九才の悪戯盛であつたのぢや所て子供のときは無邪氣なもので菩提寺から吾家に歸ると何の考もなく兩親へ出家のことを願ふたけれど長男で相續人と云ふ所から兩親は余の願ひを許さなかつたから只心の内に何とかして出家したいと思つて毎日寺小屋へ手習の稽古に通つて自分許り出家氣取りて讀書や手習に勉強して居たが或時に種々の雜書を見るときもなしに見て居ると其中に三世相や合性のことや九星のことがあつたが是が出家の因縁であつたと見えて余の干支を繰り出して干支や三世相に照り合して見ると余の干支が出家すれば仕合せがよいとあるのて恰も磁石に鐵と云ふ有様で出家の志は愈々急に迫つて來て逆も自ら制することが出来ぬから十三歳の時

強ひて父母に請ふて出家を致しました其からは一層勉強したのであるが悲しいことには當時奥州の片田舎では學者と云ふものがないから師匠に頼むべき人がないソコで余は其領土地で評判の學者だが四書は讀めても五經が讀めぬからと云つて教へて呉れぬから四書の素讀より以上の學問は逆も田舎では出来ぬといふことになつたソコで學問は何れても江戸に限ると考へたから一奮發して江戸へ出やうと思つたから兩親へも師匠へも無断で江戸へ上ると決心して近所の海岸から便船をし何んでも通れ其志を遂げやうと海岸に出て便船を求むると幸に便船があつたから喜んでこれに乗ると生憎なもので荒模様の天氣になつて船が出る事が出来ぬから天氣を待つて居るうちに天候は益々險惡になつて港近く碇を卸した船も危険になつて來た所て舟子等は余に迫つてお前は血脈を持つて居るだらう血脈は龍神がほしがかるからソレで海中が荒れるのだからお前の便船を斷ると云ふので便船を謝絶されたからソマリ途方に暮れて思案して居る所へ實家では余の脱走を聞いて心配して迎ひの者を寄起したから其志を中止し止を得ず寺へ歸つたが幸にその近所に學問の出來る侍があつたから其所へ通つて五經や文選の素讀をしたのである

余が最初父母に出家を求めた時父母は許さなかつた何しろ長男で相續人と云ふ所から

容易に許さなかつたのであるが、余が強ひて出家を求めた時、母は嚴然として余に斯ふ云ふて、汝の出家する志が果して眞實であれば出家するも悪くはない、父母もまた之を許すのであるが、平々凡々の田舎僧となつては却つて地獄の先導をする様なものであるから、出家は止めた方が好い、汝の決心は如何である、と問はれたから、實は余も此答辯には苦しんだのであるが、如何にも出家が慕はしかつたから、屹度立派な出家になるから出家を許して呉れろと迫つて出家したのだから、常に母の訓誡が身に浸つて何ても勉強せねばならぬ立派なものになつて父母に安心させねばならぬと思ふ所から、先づ大抵の困難に打ち勝つて勉強することになつた所、二十歳のとき故郷を辭し遠く江戸の樹檀林へ來て學寮に掛錫して勉強することになつたが、元來赤貧であつたから、苦學は覺悟の前とはいへ、實に非常な苦學をしたのである、實家から學費を給する譯でなく、只僅かに銀一分だけ年々貰ふのだから、學寮で講義を聽く書物も思ふやうには求められず、法衣や着物の王風は猶更のことである、依つて下谷池の端の書林某に歎願して借本して勉強すると云ふ有様、又門前の衣屋から繻三百文で法衣の古物一枚を求めて殆ど八年間も之を着用したのである、斯かる赤貧を甘んじて苦學の功を積み漸く三十歳の時に當時普通の學問もやりたく思ひたち、又樹檀林の學科も大略は卒業したと思つたから、此時一旦歸國したのぢや、歸

國して見ると鳥なき里の蝙蝠で何となく立派らしく見える所から、法類や知己の者が貴公も江戸で學問をして立派に歸國したから、是から國に居て寺を持つ方がよからうと勧めたので、余も此の勧告に迷つて成程一と通りの學問はしたし、此の僻遠の地では別段に人に頭を下げなくても濟むから一ヶ寺の住持となつても差支はないから、法類や知己の者の勧告に従はうと大に怠慢の心を生じたのである、母は余に向つて汝が歸國した志は如何、奥州地方の僧侶を見て、是と思ふか、非と思ふか、地方の僧侶はその學問も其品行も甚だ宜しくない、一人として人の師範たるべき者はないではないか、汝歸國して此儘に當地に滞つたなら、此等の者と同様で一も取らず二も取らずに生涯を過すのだから、汝が最初出家の時の志に背くのみでなく、父母が汝を棄て、出家させた志にも背くのである、苟も一旦發心出家した以上は、努めて智徳兼備の知識とならねばならぬ筈である、今母は最愛の汝が當地に留まることを拒み、再び行脚を勧むるは、實に人情の愛念には忍びぬことであるが、出家の本懐に違ふから、汝に再行脚を勧めるのである、母は汝を近邊に置いて朝夕に汝を見るのを樂みと思はぬではないか、出家させた誓もあるから、汝の當地に留まることを拒むのだ、又母は此度か生別なり死別なりであつても、苦しくない、只汝が知識となつて父母の菩提を弔ふのを、草葉の蔭から樂むのであらうから、決して當地に留つて其志

を中止してはならぬと涙を流して誠めたのである。ソエデ余は非常に慚愧して再び故郷を辭し江戸に上り尋て相州小田原に到り、當時學徳兼備の聞え高き早川海藏寺月禪老人の許に隨侍すること十二年一日の如くに暮して漸く修行の目的の大半を達したのぢや、故に余に取つては母親は全く善知識とも菩薩とも喩へやうのない有難い人であるのぢや、若し三十歳のとき飯國した儘奥州に居つたならば矢張百姓仲間の半僧坊で暮らすのであつたのだ、實に今日の穩山は全く母の賜ものであるのぢや、世の中の婦人たちも此邊の所に注意して貰はねばならぬ、兒供を養育するに就ても愛念は勿論必要であるが餘程大膽に養育せぬと愛念の爲めに誤られて折角の麟兒鳳雛も無用の長物にして仕舞ふ位なら兎も角もだが事によると母の愛念の爲めに其子の生涯を誤らせる様なことがあるから餘計なことではあるが一寸注意して置くのぢや、余は父母に孝と云ふことを常に心掛けたので、雲水行脚の時でも深く母の訓誡を奉じてゐたから、片時たりとも父母の事を忘れた事がない、特に専ら母に安心させることに心掛けたから、常に身軀も強壯で勉強するにも差支がなかつたのだ、何故に母に安心させるのが健康や勉強の爲めになつたかと云ふに、常に孝行と云ふことを念頭に置いたから、自然飲食も慎むやうになつて、暴飲暴食の如きは身軀を害して、父母の心を傷むるのであると思ひ、又自己の不攝生の爲めに、父母の心を傷むるは、此上もなき不孝であると思つて居たから、攝生には注意したのぢや、又學問に就ても其通り父母に安心をさせることを專一にしたから、不勉強であれば立派なものにはなれぬ、高僧碩徳にはなれぬ、縱令高僧碩徳にはならずとも尋常よりは少しは勝れたものにならねば、矢張り父母に安心をさせることが出来ぬと思つてゐたから、一生懸命に勉強したのである、又他人と交はるにも父母を思ふから決して喧嘩口論などしたことがない、又兩親を思ふから悪事に遠ざかつたので、何事にも父母と云ふ念が先きに立つたから、今日まで別には是といふ功能もない代りに、是といふ悪事もなく、且つ今日も猶ほ勉強して居るので、幸に身軀も健康で七十餘歳の今日に及んだのぢや、七十餘歳の今日に及んだのも多少學問をして人の爲めになつたのも、結局は皆父母の賜であつて、何とかして父母に安心させたいと思ふ一念が今日の結果をなしたのぢや、併し又若い時分には矢張り無理な事をするともある、強ち好て無理をしたのでは、ないが、時の運り合せて無理をせねばならぬ事が出来てくるものだから、若いものは此場合に注意せぬと身軀の健康を害して、父母に心配させる様な事が出来るのぢや、余も自ら攝生の大切なることを知つて居り乍ら攝生を破つたことがある、夫は朝飯と夕飯とを除きにして三里餘の時を越したことがある、前夜は露宿したから、夕飯に有りつかぬ、又朝に

母の心を傷むるは、此上もなき不孝であると思つて居たから、攝生には注意したのぢや、又學問に就ても其通り父母に安心をさせることを專一にしたから、不勉強であれば立派なものにはなれぬ、高僧碩徳にはなれぬ、縱令高僧碩徳にはならずとも尋常よりは少しは勝れたものにならねば、矢張り父母に安心をさせることが出来ぬと思つてゐたから、一生懸命に勉強したのである、又他人と交はるにも父母を思ふから決して喧嘩口論などしたことがない、又兩親を思ふから悪事に遠ざかつたので、何事にも父母と云ふ念が先きに立つたから、今日まで別には是といふ功能もない代りに、是といふ悪事もなく、且つ今日も猶ほ勉強して居るので、幸に身軀も健康で七十餘歳の今日に及んだのぢや、七十餘歳の今日に及んだのも多少學問をして人の爲めになつたのも、結局は皆父母の賜であつて、何とかして父母に安心させたいと思ふ一念が今日の結果をなしたのぢや、併し又若い時分には矢張り無理な事をするともある、強ち好て無理をしたのでは、ないが、時の運り合せて無理をせねばならぬ事が出来てくるものだから、若いものは此場合に注意せぬと身軀の健康を害して、父母に心配させる様な事が出来るのぢや、余も自ら攝生の大切なることを知つて居り乍ら攝生を破つたことがある、夫は朝飯と夕飯とを除きにして三里餘の時を越したことがある、前夜は露宿したから、夕飯に有りつかぬ、又朝に

なつても朝飯に有りつかぬので、其儘その露宿を立つて歩行し掛けたのであるが腹は空るお負に拾五六貫目の荷物は背負て居る路は峻嶒な山路で三里餘の時であるから實に閉口したが仕方がない、廻り廻りて峠まで来て下り坂になると、何ンだか前の方へ倒れる様な心持がして實に弱つたが、漸く其峠を下りて人里に出たから食事にありつかんと思ふて此處彼處を見ると、農家の稍や豊かな家がある是に頼むことに決心した此時は三人連て一人の長老は廿五歳一人は廿一歳で余は十八歳カケダシ運水であるから食事を頼むのに年長者の長老に依頼して點心を乞ふたのである所て余と他の一人は農家の門前に待つて居たのだ、スルト長老は暫時を経て得意氣に其家を出て来たから、先づ點心にありついたものと思つて喜んで居ると、長老はサモ氣の毒と云ふ鹽梅に余等兩人に向つて、折悪しく飯がない唯一人分だけあつたから吾は空腹を醫したが、尊公等の分はなかつたと云はれて大に力を落したので實に人情と云ふものは迫る所に急なものであるから、何事も人に依頼しては成就せぬ、何でも自ら進んで勉めねばならぬと思つたから、ソコで各頭銘々で他の家に就て點心を乞ふて空腹を癒したのぢや、かゝる場合には得て健康を害するもので、食の鹿細は素より量の過不及さへ考へないでやらかすから健康を害するものであるが、余はこの場合にも父母を思つて暴食はしなかつたのぢや、今から思ふと余

の健康と長壽とは全く父母の賜であると思ふのぢや、誰もかれも父母を大切と思つたら健康を害さぬやうに暴飲過食はつゝしむがよろしい。

余は天保十二年の凶年に遭遇して生涯の大幸福を得たのである、此年の飢饉は非常なもので何分にも食物が不足であるために餓死したものが無数であつた、その惨状は今からこれと思ふと實に膚に粟を生ずるの感がある、一寸近所を歩行しても僅かに十町か十五町の間に餓死行斃の五六人もみると云ふほどで、なかく惨状を極めたものである、一轉に此時代は今日と異つて封建制度の時代であつたから、領主がみな堅く其封疆を守つて、南部領は南部領、仙臺領は仙臺領と其封疆を限つて、他領へは一粒たりとも米穀を賣り出さなかつたのだ、ソコで其領内のものが領内中の米穀を食いつくしたときは、如何に金錢が澤山あつたとて餓死せねばならぬと云ふ譯で、今日から見ると實に迂濶な話ぢやが此時代の制度の習ひで仕方がない、此年の餓死も全くこれがためて半分は政治で殺したと云ふやうな都合だ、其餓死や行斃が貧窮人ばかりかと云ふに決してそうてはなく、身に絹布をまとひ頭に籠甲の櫛をいたゞき、懷中には澤山の金錢も所持しつゝ、餓死したものが澤山あつたのぢや、余は生得臆病の性質であつたが、此の凶年に際して、一町に一餓死十町に十行斃、夜行すれば死人の頭を踏むと云ふ惨状を目撃したから、最初の中は氣味も悪く、

なんだか恐しいと云ふいは、臆病神に誘はれつゝあつたが、毎日毎夜のことであるから、つひには死人の恐るべからざることを心底から合點して臆病の性質が變化して餘程大膽になつたので、決して死人を恐怖せぬばかりでなく、一切の事物に驚かぬやうになつたのぢや、これは疊の上の水練でなく實地に経験した學問だから、理窟や議論を離れて物に恐怖する念が薄くなつたのぢや、此年の飢饉はたゞ余が臆病を治療したばかりでなく、此外に有益なことがあつたのぢや、それはなにと云ふに、衣食住の粗末に耐忍することの出来るやうになつたのは、全くこの飢饉の賜であるのぢや、天保十二年には草の葉でも木の芽でも木の皮でも、苟くも食べるものはこれをたべたので、鹽加減も料理鹽梅もあつたものでなく、口に食べて腹さへ空らなければよいと云ふのであるから、食の細粗を辨する邊がなかつたのである、梅は寒苦を経て清香を發すと云ふが、實に苦節を全ふすることは順境では出来ぬ、逆境が即ち耐忍を生む母と云ふべきである、何はともあれ余が晩年まで苦學を厭はぬのは、此年の凶歳の経験が多少の力となつて居るので、余の經歷中には忘るべからざる高恩のあつた年と云ふべきである。

次に修行事に就て話さうが、修行事のごとは古人も尋常な苦辛でないといふてある通り、尋常二様では修行は出来ぬものぢや、今日では諸種百科の學問がみな夫々の規則があつ

て、學問の系統も順序もあることであるが、余の學問時代ときたら、系統もなく順序もなく無暗矢鱈に勉強すると云ふ方であつたから、眞實の學問をするのには一層の困難を感じたぢや、殊に余の貧困なる書籍の購求すら出来ず、その困難をさわめたことは一通りではなかつた、最初梅檀林へ掛錫した頃に、吉祥寺の前に菊地竹庵とて學問に秀でたる儒者があつた、此人は初め信州松本の藩主に仕へて藩學の教儒をして居つたが、其性質が磊落で究屈な奉公が出来ぬ處から、松本を致仕して江戸に來り、自宅にて漢學の教授をして居つたのぢや、斯る磊落の先生だから、行儀作法などには少しも頓着がない所から、自然に人氣を損じて不行儀先生と評判せられることに爲つたから、梅檀林の二百人近い學侶の中で誰一人として此の先生に學ぶものがない、然るに余は獨り此先生の門に學んだので、先生の行儀作法は余の學ぶ所ではない、先生の學問は即ち余の學ぶ所である、且つ一藝に秀でたるものを、猥りに誹謗して之に學ばざるは、ツマリ自己の不徳であると思つたから、毎日不行儀先生の門に入つて勤學したぢや、茲に一場の笑話がある、并は余が先生の所へ熱心に通學する頃は、丁度盛夏三伏の潺暑であつた、特に先生の宅は手狭にて、臺所も座敷も玄關も書齋も合併であるから、その暑さ加減と云ふものは、誠に非常なもので、釜中に煮らるゝの思ひであるから、先生は例の磊落の氣象の事として、私は暑くて堪らぬから、裸形で講釋

をするから、足下も裸形で聴くが好いと圖らずも先生が余の衣服を見たのぢや、スルト余は此時に裕を着て居たのだ。裕を着て汗を流して勉強して居るのだから如何にも妙な物であつたらう。所て先生は不審さうにナセ裕を着て居るかと思つたのぢや、余は困つたことを問はれたとは思つたが仕方がないから、貧乏で單物の工夫が出来ぬから裕を着て居ると答へた。先生は裸形、余は裕、是を餘所から見たら丸んで判じものであつたらう。ソシテ此裕を洗濯するにも着替がないから非常に困つた。困つたと云つて洗濯をせなければ臭くなるから、是非なく夜分に洗濯をするのぢや、晝は外出することがあるから夜分の洗濯は夜分に洗濯をして之が乾く間は一反風呂敷を頭から覆りて蚊張にも布圍にも着物にも三役兼帯としたのである。今から思ふと随分面白くもあるが實は哀れ至極な話であつたのぢや。

それから余が宗門の修業に就ては別なこともないのさ。宗門の修行のことは其人でなければ解らぬのであるから話すことも實は餘り好まぬが、ザツト經歷を云はう。余は二十歳の時に始めて正法眼藏の提唱を聞たのであるが、誰も知つての通り正法眼藏は宗祖の皮肉骨髓であるから二十歳や二十五歳位の素雲水の學識では逆も解らぬ。余が始めて聴たときは謂はゆる蚊子鐵牛の威て何んとも言葉の付け様がなく實に難解難入て古來より

六ヶ敷ものとは聴て居たが、借々六ヶ敷ものであると望洋の嘆を懐いたのである。併し御開山の御思召は此の法身舍利にあると思つたから、余は末世下根の者ではあるが何んとかして正法眼藏を参究し一生涯に縱令一返でも好いから人の爲めに之を提唱したいと思つたから、ソコデ生涯の間には是非とも之を参究して御開山の高恩に報ひ奉らんと誓願したのでぢやが此の眼藏を参究せんには、俱舍唯識等は直接な關係は少ないとしても天台華嚴等を知らなくては到底御開山の御思召を参究することは出来ぬ。謂はゆる五部の大乘法と五家の宗風とを知らざれば、眼藏を参究することは出来ぬのぢや。

當時越後の愚禪和尚は眼藏家と呼ばれた人だから余は愚禪和尚に参じて眼藏を問ふたが、毫も得られぬのであつた。實は得られぬのが當然であつたのぢや。後に小田原の早川に到り海藏寺の月潭老人に参ずることが前後十二年で此間に月潭老人より眼藏の提唱を二回聴聞したので漸く臍氣に御開山の御思召を窺ふことが出来たやうな心地がしたから江戸に歸つて宗参寺で始めて眼藏の提唱をして初志の幾分に酬ひたのである。此時は恰も余が四十五歳の時であつた。

月潭老人に参じた前後十二年の間に奕堂禪師にも参じたことがある。余が尙ほ若年でありし頃だが、小石川のドン／＼橋今の水道橋の所を通行すると向ふの方より伴僧を連れ

た和尚が見えるから、大己に對する禮であるから橋の手前に立つて居てその和尚の來るのを待つて叮嚀に問訊をして余は向へ彼の和尚は此所へと別れて別に言葉も爲替なかつたが、其後奕堂禪師の所へ往て掛錫した時に禪師が余を見て六七年前に江戸の小石川のドン／＼橋で問訊したのは尊公だつたなと言はれた時には何となく喪身失命の感に打たれた、宗門の修行は人々の脚踏下だから左之右之日用光中に於て暫時も放過せぬ様にせねばならぬのぢや。

併し余も矢張り大我慢を生じたことがあるぢや、それは少しばかり經律論を學んで、俱舍唯識や天台華嚴等の諸宗を涉獵し方等諸經の楞嚴維摩等を讀んだ當時は全く古人の訓誡に漏れぬ外道の眷屬となつたのである、その當時の考へては經論を精しく調べその道理さへ解釋すれば別に參禪工風はいらぬ實參實究などはいらぬと慢心したのである、是は只余一人ばかりの病氣でなく少し學解のあるものは大概此病氣に罹るのであるが實に危険な病氣であるのぢや、その後ち段々と修行を重ねるに隨つて前後の見解を拈じ來つて自ら仔細に參尋して見ると、従前の見解は悉く妄想分別の智解情量にすぎぬのであつた、禪宗坊主は口癖に、本來無一物と云ふが、六祖大師の言葉だから、その言葉に現はないが、若し參不尋の者が、本來無一物を丸呑にしやうなら、夫こそ大變なものになるのぢや、若し

無一物にして一物の見るべきがないと云はゞ直にこれ空見斷見の外道で、又之に反し何んでも極樂の欣ぶべきがあり地獄の厭ふべきがありと云はゞ、有見に隨して執着を免れぬ神我外道の徒となるのぢや、ソコデ空見も執着であれば有見も執着で、執着の見は法執の偏頗であるから外道の眷屬となるぢや、有見の執着を以て見るときは、一切みな有相で、空見の執着を以て見るときは、一切みな空相である、縱令有相に執着して一切みな有相なりと妄想するも諸法は元來無性でないか、縱令空相に執着して一切みな空相なりと妄想するも世間相常住でないか、茲が即ち實參實究の入用な所である、場合によると多くは病氣に罹るのぢやから注意するがよい、余が七十七年來、經歷された、經歷談此の外にも話したいこともあるが大分時刻も遷つたから、この位にしてこらうよ。

垂 誨

其 一

御前方も大分此頃は種々なることを心配することに爲つて来た、宗乗や餘乗の外にも色々なことを學ばねばならぬと云ふことになつたが、私の若い時分などは色々心掛けると云ふても大抵天台なら天台、華嚴なら華嚴と云ふものを先づよい加減に聴く位のこと、誠に學問が簡單であつたが併し今日で見ると村上、專精氏などが佛敎統一論を書いた處を見ても中々容易な力ではない、今日の哲學とか何んとか云ふ種々の學問に對照して比較研究すると云ふには、僅か百卷や二百卷の書物位を讀んだ位では到底いけない、御前方もそれが爲には澤山の時間を費すことになる、従つて兎角我専門の宗乗は疎かになるが成るべく専門のことは氣を附けて遣つて貰ひたい、私なども若い時分にどうも専門のことは幾分か心得なくてはいけないと思ふて西京に往いて見たが、當時此の宗乗に熟達して居るものは誠に少く、此人なればと思ふて聴いて見ると、碧巖一方に偏つて居るとか或は從容錄一方で遣つて居るとか、どうも思ふ人は得られないです、而かも其當時は此等の人

が一方の大禪師大知識として本山などに名を高うしたです、今日ではそらはいけないと

うか充分奮發して専門のことを研究して貰ひたい。

それから布敎などのことに就いても此間の會議から色々心配して、布敎が遅れて居るから是より盛にして地方へ派出しなければならぬが、何れ大學林出身の御前方は布敎師にもならなければならぬが此布敎と云ふことに就いては私も明治八年の會議の時分から能山の監院もして居つたこともあつたが餘程考へて布敎をしなければならぬと思ふて居つたそれに就いて思ひ附いた御話をして置くが、彼の御前方も聴いた禪宗史、要にもあるが、あれは中々能く書いた宗門の人でないものがあれだけに材料を集めて調べると云ふことは一通りの苦心ではない、先づあれにある通りだんだん宗門の沿革を調べると御開山の此宗門を開かれたと云ふものは中々深意のあることで、全躰此日本の佛敎の始まりは多くは御祈禱を以て開けて来て居る、國家安泰とか皇祚長久とか云ふことで就中平安朝の佛敎は盛んであつた叡山も高野も皆そうである、それからだんだんと武家が勢力を得て、足利とか北條とか云ふものが政權を握る様になつて禪が起り初めて来た時は追々と叡山も高野も勢を失ふことに爲つた、その時に榮西は禪を開かうと思ふたけれど、共矢張平安朝の風習が残つて居て、國民の多くの信者は現世祈禱を尊んで居るから榮西禪師も充分に禪を弘め兼ねられた、興禪護國論などを書いて盛んに禪を鼓吹しようと思ふ

たが却て反對が起きて叡山などから憎まれ遂に榮西禪師は志を達することが出来なかつたソコ鎌倉へ參つて禪を開かうと思ふてもそれも思ふ様にはいかない御開山はそれを能く御看破なされた決して叡山や高野に抵抗はしなさらぬそれで御開山の御思召は日本には純粹の佛教眞の宗旨はないと思ひなされて居らる故に西來祖道我傳東と云はれて全く御自身が眞の佛教を日本に開くと云ふの御思召してあるサテその佛教は何を以て開くかと云ふに佛教は則ち戒定慧の三學を以て基とするより外はないそれは寶慶記にもある通り只佛法の總府と云ふて禪宗とか曹洞宗とか云ふ宗名は御嫌ひなされてある皆是れは外より附けた名であるこちらから指して云ふ譯ではない只眞實の佛法を開くと云ふに過ぎないそれは辨道話を拜觀しても分るそれ故叡山や高野に抵抗する様なことはない北國から波多野氏の招待を受けたと云ふに就いても餘程の深い思召もあるソコを能く考へてみるがよい彼臨濟宗などは夢窓國師を初め盛んに朝廷の歸依を受けた鎌倉五山京五山が開けたと云ふのも此は支那の文學を持つて來て勢力を得た御祈禱でも念佛でも題目でも何でもない支那文學で盛んに爲つたそれ故臨濟には文章も詩も立派なものが澤山あるが此曹洞宗にはない此曹洞宗はそれより遅れて其時分にはズット奥州九州の邊鄙の方に開けて平民の教化に力を入れた曹洞土民と悪口を云

はれても全く夫に相違ないから仕方がない併し今日に爲つて見るとそれが善かつたのであるそれでだんだん武家も歸依する様になつて東は津輕南部とか西は長州佐賀に至るまでその武家の氣に投じて禪が四方に弘まつた其上に土民を教化することに勤めた故全く曹洞宗が開けて來たのである若しそうでなく矢張其當時他の人の道る同じ道を競争して歩いて居つたらツマリ敵も反對も多かつたに相違ないソコを御前方も能く考へて布教の志を起して貰ひたいソコで御覽なさい其當時御開山は如何に鎌倉五山が盛んであつても鎌倉には我宗旨を弘め様とはしなさん此れは一興一敗で盛んなるものは必らず衰ふることがある故ソコを見て却て人の開かない處に開くと云ふ其志の深いこと殊に國王大臣には近く可らず深山幽谷に住して一個半個を接待すると云ふ其見識の高いことまた朝廷より紫衣を賜はれても御辭退申すと云ふ其に續いて太祖國師も明峰様も參内する折りは澤山あつたが遂に參内をなさらなかつたコゝ云ふ宗門の思想は今日の僧侶にも幾分腦髓に染み込んであるそれで平安朝が衰へ従つて祈禱佛教が衰へたと同じく臨濟も五山十刹と云ふて朝廷に依て一時は盛んであつたが其當時の朝廷の勢力が武家に歸すると共に矢張臨濟も衰へた併し今日此曹洞宗は曹洞土民と云はれても平民の化導に依つて重きに開けたのであるから矢張り大名寺と云ふものは地方の寺

も衰亡した處もあるが、平民に依つて開けた寺は地方にそれ、残つて居て今日でも中々盛んである、マインソラを勘考して何んでも一時盛んであるとて當てにはならぬから、布教をするにも何をすることも先づ第一自分の境界を高め立脚地を定めてかゝらねばならぬ。

それから此宗門の學校のことに就いても同じこととて、此宗門の學校が東京に開けた時分には乞食學校と云つた位である、徳川時代は其の學校や東叡山の學校と云ふものは中々盛大で今の増上寺や東叡山などは尤も勢がよかつた、それから見ると吉祥寺學校は全く乞食學校と云はれても仕方がなかつた、本山寮とか加賀寮とか云ふ其地方々の僧侶が集まる處が分つて居て都合二十四軒合併の學校である、その居る處はまるで豚小屋同様なもので御粗末な學校であつた、そう云ふ乞食學校から偉らしい人物が澤山出来た先づ近い處で、山、面山、指月、洞水、と云ふ様な人が出た、それでその當時は此乞食學校が却て其内實、勢がよかつたので上野や其他宗の學校はあまり裕かすぎ居る勢が自然奮發力が薄らいだものと見える、貧乏儒者などが來ても芝の方では入れ附けない浪人儒であると、まるで奴隷の如く取扱ひ先生とも何とも思はん、吉祥寺はそうではない、私の若い時分には儒者の五人からも居つて、門前の裏店を借りて講義を聴かせ僅かな暮しをして居つた

けれ共皆先生々々と云つて聽きに往つたものである、雲水など皆錢がない私も貧乏の仲間、殊に儒者は尙貧乏と云ふのであるから、吾々が往つて聽くには心易く聽けてよかつた、判然覺えても居ないが先づ大學の講義が三十三文中庸が五十文孟子四卷で二百文か二百五十文であつた、こう云ふ風であつたから他の裕かな儒者は多くは乞食儒者と云ふて相手にしなかつたが、後にはだんくんと勢力を得て駒込へ往つてその乞食學校の儒者と仲間入りをして講義を遣つて見なければ儒者の聞えが惡るいと云ふ評判が高まつて來た、先づそう云ふ工合で遂には自然立派な人も出来たのである、今日の様に真宗學校に負けないと云ふて袴を穿いたり洋服を着たりそんなことは決してしなかつたのです、全く學校が吉祥寺にあつた時分はあの邊のものは皆敬服して居つた、それ故、何でも能く事を考へてしななければいけない、只歴史や其他の古いことを覺え議論するだけではない、いかな實際を能く考へてやらんけりや、いかな人の眞似をして人の背後に立つ様なことではない、いかな何も人の眞似をするには及ばぬ、色々の眞似をして入費が高く掛る様になれば一方から取らなければならぬ此取らるゝと云ふものは餘り人の喜ぶことでない、何でも成るべく取らん様に入費のかゝらん様に人々が氣概をズット高く持て實際の力を養ふ様にしなければ、之れからの世の中には立てまいと思ふ、

それから終に在家の化導と云ふことに就いて簡単に申して置くが、此在家化導に就いてはまづ本宗でも修證義を以て標準とすると云ふことに爲つて居るが、此は故、昨、上、管、長の時分にそう決めたので此れは誠に結構である、御前方も此は能く心得て貰はんければならぬ、あれは單に在家化導にのみ用ひると云ふてはならぬ、在家出家共にそうてなければならぬ、何でも物は一方にのみ偏してはよくない、此れは餘分の話だが私の性は西有と云ふことは御經にも俗書にも典據がある、素より佛法中の諸經は佛の説かれたものであるから敢て區別はない、天童山には天台眞言念佛等皆備つて居る、日本では一寸區別がある様に思ふが別に阿彌陀と云ふことは親鸞上人の專賣特許でも何んでもない、何でも物は一方にのみ區別を立て、見る様ではよくない、今此修證義に就ても能く考へて貰ひたい、在家にのみ用ゆると云ふ考では困る、ソコデ此曹洞宗に於ては近頃のみならず前々より安心法が定まつて居るとか居らんとか大分喧しい議論もあるが、何でも好く御開山の御旨意を酌み取て見ないと、そんな議論も起る、我宗にはチャント安心法があるので、御開山は眞實の佛法を日本に弘めたいと云ふ即ち前にも云ふ通り、西來祖道我傳東と云ふ御見識で單に一方の宗旨達磨の座禪を弘め様と云ふ譯ではない、よくそこを酌み取つて安心と云ふことを定めねばならぬ、サテその眞實の佛法を弘めたいと云ふは大躰が戒定慧

の三學である、其中在家化導に應用して來たのが通途傳戒即ち菩薩戒を以て化導された、それ故鎌倉より時頼の招待を受けても又波多野氏の皈依を受けても皆血脈を授けた、ソコデ我宗では僧俗を問はず菩薩戒を以て一般を化導して居つたのです、此れが佛法の正傳である、それから月舟山月舟の時分でも餘程此れは心配したものだと思ふ、眞宗や其他の宗旨には念佛や題目が流行るのに、禪宗には安心の法として只公案を授けたり坐禪をしたりして居る、そこで月舟山の時分には授戒と云ふものを初めて通途菩薩戒を授けることにした、これはマ一別に何んにも書いてはないけれども今の授戒よりも餘程面倒の様で、月舟の古記などを見ると授戒を以て通途信徒を化導したことがある、百五十人位あるとそれが當時は大授戒で非常に殿しい、何でも晩には米湯を飲ませてそれで御拜が多くて説教は滅多にない、一遍の授戒で何でも困ると云ふ有様であつた、此節はまるで安氣な授戒で樂に成つて來た、先で彼様に授戒を初め菩薩戒を以て教化しなければならぬと云ふとは月舟山時代より多く爲つて來た、ソコデ今日の修證義は誠によい、大躰我宗では受法あつて捨法はないが、兎に角授戒を受け様と思ふ時は決して其心は消滅しない、それが盡未來際消滅しないから、それが金剛不壞の種子となる、彼の懺悔滅罪と云ふより受戒入位發願利生行持報恩此四ヶ條にて本宗の安心も定まる、此に就て尤も注意すべきは懺

悔滅罪であるが何んでも罪と云ふものを向ふに見て消滅しようと思ふ考へて見るといへば直ぐに無と云ふ無の念が起ると迄往つても無無無丁度何んのことはない無門關には五十からの無と云ふ無がある。趙州も無と云ふに就ては大分喧しい。ドコ迄も無の念を引くそれではサツパリいけない。何でも罪を向ふに見てはいけない。それでは消滅が出来ない。此懺悔と云ふに就ても作法懺悔取相懺悔觀無性懺悔の三つがあるが向ふに見ると決して消滅しない。法界にあつて自分が礙なく無所住にして其心を生ずると云ふ境界になつて初めて懺悔が出来、只懺悔滅罪と云ふだけでは授戒は濟まない。何ぞ濟まぬかと云ふに授戒には先づ傳受戒發得戒性得戒の三通りがある。それで自然に得る處は善來得善來迦葉と云ふ如きである。だん／＼今の羯磨授戒即ち作法に依つて授戒をする。今は三皈依三寶に歸すると云ふが即ち傳授戒である。そこで傳受戒より發得戒自分から發心發得して戒鉢を合點して成る程と性得戒に入る爰に初めて正戒に入る。尙此性得戒と云ふ素よりそれはドコから得たと云ふことはない。從來自性に戒があるそれが性得戒とある。自性なければ發得の仕様がな。性得戒に至つて初めて見性の分がある。此を正了縁の三佛性に當つると性得戒は正因佛性になる。發得戒か了因佛性に當り傳授戒が緣因佛

性になる中々受戒入位と云ふても、只南無三世諸佛と云ふてお拜や合掌ばかりで在家を化導しようと思ふといけない。先づ人々の受戒はドコに受戒して居るか能く人々參究して見なければならぬ。それが分れば初めて懺悔の様子菩薩大戒の有難味も分り三聚淨戒の動かないことも分る。此れが分れば一念發起する此一念の間にも安心立命も出来る。ソコを能く合點して此修證義を取扱ふて貰ひたい。此一念發起する心の外には何も無い。上に云ふ如く、一念授戒に入りたいと云ふ其一念の上に於ても安心が出来、道理がある。マザットこんな様な話して受戒入位と云ふものは誠に結構である。それから發願利生行持報恩と云ふこれは云はなくても分るが此れは全體在家に預ける品物ではない。皆人々の負ふべき荷物である。猥りに在家にあてはめて授戒をするから善い儲かつたらブツタクると云ふことではいけない。眞實に發願も利生もして貰ひたい。行持報恩と云ふてもお寺へたんとお布施でも持つてくる様な工風をするが報恩であると云ふ考へを起してはいけない。行持と云ふに就ても彼の迦葉尊者は鷄足山に入るまで十二頭陀の行をしたと云ふ。此れが迦葉の行持である。まだ百丈禪師などは一日成さなければ食はずと云ふ。此れが百丈禪師の行である。亦佛地に至るも尙不退なりと云ふ。此れが佛の行持である。只此行持と云ひ報恩と云ふことを、在家の仕事と思ふて輕々に思ふてはいけない。何んでもこれ

から能く世の中のことを考へてどう云ふ布教をしてどう云ふ處で此佛法を維持して行くか、追々人智が進んで來ると今迄の様ではいくまいぞうかと云ふて、只妻を持ち魚肉を食ふて在家と同じ様にいて往くと云ふことも如何であらふか、何んでも布教と云ふことに就ても人の爲し難き處を爲し行ひ難き處を行ふて往かなければ人を服することは出來ない、此れから追々人智が進むと迷信佛法が衰ふると同時に互ひに新たに本當の布教をしなければならぬ、一五十年や百年は今迄の様な商賈も行はれるか知らんが此れがだん／＼進んで來ると必ず衰へてくる、只自分が一代だけ我儘をして安氣なればよいと云ふだけではない、御開山でも月舟、円山でも中々將來を見込んで心配せられてある、安氣なことを仕様と云ふ様なことは毫もない、私も及ばず乍ら將來はどうかと考へて見ると心配てたまらない、もう五十年も生きて居つて世の中の變化を見たいがどうもいかな、お前方はこれから樂しみてある、斯ふ云ふ世の中に生れたは幸福である、何んでも晝夜稼いで中々食へないといふ世の中、斯ふ云ふ時代に生れ斯ふ云ふ時に一生懸命徳を積み勉強して貰ひたい、私の様な泰平な時に生れたものは誠に不運で、徳川時代の様な御朱印地や何かに依つて安氣に遣つたものは運が悪い、本當の坊さんにならんで濟んで仕舞ふ、今日の様な世の中に生れたものは、大變運が善いのだ、ぞう云ふ、晝見て遣れば、將來

佛法の衰ふる氣遣はない、先づ今日はこれで置くがどうか御前方もシツカリ遣つて貰ひたう。

其二

一、持戒禪定等學であるから持戒と禪定とは決して離れて居るものではない、持戒の當體が即ち禪定の姿、禪定の姿は持戒の當體であるのぢや、しかるに近頃は禪戒のことに眼を着けるものもなく、且つこれを研究するものもないやうであるが、そも／＼これは信心の力が薄弱であるからのことだらうよ。

今回は少し禪戒のことに就て談話を試みようと思ふが、まづ第一に戒法の本源のことに ついて話さうが、其の戒法の本源は何であるかと云ふに、御開山の仰せにも儀式に信成就があらはるゝのが本源ぢやとの意味がある、されば別に戒躰戒相のことを仔細に論ぜずとも佛祖正傳の大戒は眞實にありがたいものぢやと云ふ信仰の一念が萌した時が、即ち戒躰の本源となるので、戒には始めといふ始めがない、最初より無始無終て是が戒の始めといふ時はないので、苟も茲に物あれば則あるのぢや、戒は物を制裁する所の本具の性徳であるから、物に随つて其性徳を現前するのだ、恰も天象の太極の如くて、太極の一氣は四時に循環する陰陽と共に運んで、毫末だも忒ふことなく、春來れば春澤に春聲を放ち、秋來

れば秋山に紅葉を織りて其條理が亂れぬのである。戒の物に於ける矢張條理井然として一絲一毫も移動を見ることがない。併し其條理の爲躰は一氣に先後ある次第でなく、只一氣に包含せられて居るので春花秋月の條理を隔てるとか又は潺湲祁寒を碍めるとかいふことの無いと同様である。戒は物を妨げず物の條理を包含して其物其物の所を爲して高所は高平に低處は低平にして物の爲めに則となつて居るのぢや若し強て禪戒の本源はと云はゞ謂はゆる靈源妙に皎潔たるのであらうが其皎潔の所に留まると理に契ふも悟に非ずで結局不自由の擔板漢となつて實際の理致に契ふことは出来ぬのである。故に戒は無始無終で而も無作の妙用でなければならぬ。即ち無始であるから古の古を盡し後の後を盡して邊際がない。曾に古の古を盡し後の後を盡して邊際がないばかりでなく殆ど其端緒を見ることが出来ぬ。一念信仰の心が發起した時に授受の妙用が現するのであるから。信念の端緒は見られぬのである。信念は即ち無始無終本來圓具の當躰現成であるから。蠢動含靈苟も衆生あつて以來衆生の心内に本具して存するのである。併しながら衆生心内に着想せば早く自ら本具の戒躰を破るので元來無始無終なる戒源に心内の心外との論量は絶して居るから始らく合生あつて以來必ず具して存せりと云ふも相に着し心に拘泥せば節目を生じて圓具の戒源とはならぬのである。理に涉り事に滞らば眞實

の信心信仰ではない。實際の正念相續ではない。戒の源たる信は理にも非ず事にも非ず、而も理に即し事に即して言語を絶して居るのぢや。然れども其戒相は清嚴にして肅整でなければ成就せぬのである。即ち高處は高平に低處は低平に雁の短き鶴の長き棘の曲れる松の直き悉く現成して毫も紊れざる規矩井然たるもので物の本能を護持する圓具の戒相でなければならぬ。戒の相は斯く嚴肅であるが戒の源は無始であるから戒源は心に求むるも得ず口に傳ふるも得ぬので、ツヤリ戒源は言ふべからざるものである。無始の戒源は事理の二端に涉つて而も事理の法に墜ちぬのだから言ふことが出来ぬのぢや。若し又戒源を見たとき云はゞ其見たるものは眞際でない。即ち情量知解の分儕であつて決して眞際の戒源ではない。眞際の戒源は最初より言端を離れ語端を離れて、一念信心の當所に現成するので、退歩承當の當人に圓成するのだから、事理の邊際や情量知解の計度に於て知るべきものではない。然も其之を躰達し之を領悟するときに、戒脈の相續が出来、戒身の轉ずることが出来るのぢや。戒は信成就に淵源するのだから、之を信得及して體達し領悟するので信得及の外に躰達すべき戒躰もなく領悟すべき戒相もないのである。苟も能く信得及して之を體達し

之を領悟し我が物になり、合點して戒と一枚になりたるときに正傳の傳戒血脈を相續することが出來且つ從前娘生の面目を轉じて戒珠光明の域に進むのである、併し所得ある次第でなく本地の光明を發揮する當所が戒身の轉所である、而も戒脈を相續し戒身を轉ずると云ふも、皆な自得する譯でなく必ず師受即ち戒師より戒法を授けられ自分に信得及して之を受くると云ふ儀式の當所に成就するのである、若し此の授受の式作法がなかつたならば戒法は其起る所がなくなるのである、受くる弟子の信得及と授くる戒師の戒光とに由つて成就する戒は此の式作法即ち信念相續の表現の外に求むることが出來ぬのだから其起りは即ち信受にありと知るべきである。

故に先佛も信受の當所に誦して授け、今佛もその如く信受の當所に誦して受くるので、即ち弟子も戒師も信受して佛々祖々正傳の式作法に依つて成就するのである、式作法を外にしては信受の法は現成せぬのであるから、法即式作法であつて當面に授受の信成就が現成するのである、その傳ふるも、その得るも皆信成就であつて、信成就の外に戒軌の現成も戒相の妙用も現はれぬのである、前佛の授、今佛の受、唯信得及して其式作法に一遵するとき得戒あり傳戒あるのぢや決して理屈や情識の邊際ではない。

この授受には但し前後はある、即ち前佛の授、今佛の受、吾の是の如く傳へ、汝の是の如く得

たる前後はありといへども始終のある次第ではない、戒源は無始であつて其端緒を尋ねるも決して得ることの出來ぬものであるから始末のありやう譯がない。

既に始末がないから、佛祖の邊際を盡し衆生の邊際を盡して居る、佛祖の方面にも墮せず、衆生の方面にも墮せず、生佛の邊際のあらん限りを盡して、信成就の戒の外に一物も存在するものがない、即ち純一無雜の戒軌て其式作法に現成せる一枚の信得及であるから此戒法のみ獨り萬靈の規則となり常道となつて過去の過去際より未來の未來際を盡して居る、乃ち佛法の根本は戒法であるから、諸佛本源の常紀法則となり、衆生成佛の恒信の符となつて此間に疑着も存せず餘念も存せぬので、經に謂はゆる衆生佛戒を受ければ、即ち諸佛の位に入り位大覺に同ふし了る、眞に是れ諸佛の子なり、とある佛種相續の信符である。

而して其授受は全體何から起ると云ふに、別に佛から起るてもなく、祖師から起るてもない、唯先佛の法を信得及し、祖師傳來の法を信得及するに起るのである。

舍那佛の言く、一切の行は信を以て首と爲す、衆徳の根本なり

釋迦佛の言く、若し一切衆生、三寶海に趣入するには信を以て本と爲す

と、舍那佛も釋尊も同じ信念を以て一切佛法海に入るの根本とせられて居るのである、二

佛の聖言是の如くなるときは信を以て能入となすこと固より然るべきであるから、即ち佛祖正傳の禪戒此無始の佛戒は唯信を以て戒源とするのである、信の強弱は蓋し得戒の成就に關係することが至大であれば禪戒を受けんと欲する者は、先づ第一に佛祖の聖言を信得及して深く三寶に歸依し奉らなければならぬ。

其三

戒といふことは、ことごとく人々か具有てをる所のものであつて何も今急に餘所から得來つたとか、または見附だしたとか云ふ譯のものではない、即ち戒とは佛性と云ふほどのこと、殺すとか、盗むとか、凡て悪いことをしてはならぬといふ戒なのである、云ふまでもなく、天地間如何なる理法から眺めても、人の生命を奪うてよろしいといふこともなければ、又如何なる教にしても悪いことをせよと勸むる教はあるまい、してみれば殺すな盗むな、凡ての悪いことをしてはならぬといふことは天地間に於ける自然の道理であるといふことも思ひ知らるゝであらう。

凡そ人間と生れたからには誰れ一人としてこの佛性を具へて居らぬものはないと同時に此戒法は人々の分上に備はつてをるのであるから、今此處で授けるとか受けるとかいふたところが、何にも他人から立派な玉でも貰ふわけでも何んでもない、私とてもそうじや、私が小僧の時分から戒法を受けてだんぐと修行して來たのであるが、何も師匠から戒を貰つたと云ふことはない、只佛の説かれた所の經を聽いたり見たりして、自分の持つて居る智慧のそのまゝに發達して來たゞけのものである、今皆さんが戒を授けると云ふにしても、各々が持つて居る智慧、自分々々の佛性を發達せしめ開かすまでのことじや。

「殺生戒と云ふことに就いて云つて見ても、物の命を取ると云ふことは、各々が思慮分別を費して考へるまでもあるまい、殺されると云ふことは決して心能くないことに決まつて居る、虫子でもそうじや、蟻などが集まつて一生懸命に蟻塚でも拵て居る處へ、水でも滴らすものなら、それこそ蟻に取つては大變であつて決して蟻の喜ぶ處のことではないのである、凡そ生物として命あるものは命の欲しくないものはないのじや、況んや萬物の靈長とも云ふべき人間が恩を受けた人を殺すとか、或は自分の父母や兄弟を殺すとか、又主君の命を取るとか云ふことは、大罪人であると云ふことは申すまでもない、「斯様なわけて戒と云ふことは、悉く天地の道理として各々が持つて居る所の智慧を明かに顯はして行くのじや、即ち人々具有の佛性を磨き上げて行くに過ぎないのじや、それがどうも此人間と云ふものは煩惱妄想の爲めにその佛性を蔽ひ隠され、五欲六塵の巻に迷ふて居る

のは誠に不憫なものである。

ソコで戒法と云ふものが色々別れて居る即ち我が宗では十重禁戒と云ふて殺生する
なとか偷盜をするなとか邪淫を犯すなとか云ふ様に十通りにも分けて置くが是れは只
佛様や祖師方が後に細かく區別を附けて示しに爲つたまでのことて人々持つて居る
所の佛性の光が自然と發達して來れば別に佛様や祖師方のお世話が無くとも自然と戒
法の道理を守らなければならぬことに爲つて來るのじや、マ一能く其處の道理を考へて
戒法を受けると云ふに就ても何か物でも貰ふ様な考を起してはならぬのである。お前
方に授ける處の戒法は菩薩戒と申して在家出家に通じたる有難い大乘戒なのである。此
菩薩戒と云ふものはどうして尊ひかと云ふと心地戒と申して心を土臺として設けた戒
法であるから一旦戒法を受くるとになれば心では始終破らないです。それ故たとひ破戒
の罪を受けても菩薩戒を受けた功德は失はぬことにならず。地獄へ行つても何處へ行
つても戒を受けれた功德は決して失ふことはない。勿論破戒の罪だけは仕方がないこれ
は受けねばならぬ。凡そ罪を造ると云ふ場合はどうもその報ひと云ふものは免るゝこと
は出來ない。コチラの方で善いことを致したからそれで罪業を償ふと云ふことは、それは
いけないです。微塵も暗ますことは出來ないのじや。

人間と云ふものは身も心も悪心を生じない様惡事はせぬ様にゆけば結構であるけ
れども、どうもそれが持たれぬものぢや、自分の心に氣に入らぬことがあると渠奴は憎い
と思ふたり死ねばよいと思ふたりして、始終心の邪見と云ふものは止まないものぢや、表
面は立派に見へて居つても腹は汚たない、先づ人間の心を權衡にでもかけて見ると、ま
てゾ、スイの様なものであらうよ、それでは佛にはなれぬ、凡夫の岸を離るゝことは出來
ない、何んでも内外玲瓏何處から見ても明き透る様にならなければならぬ、皆んな佛と變
らぬ立派な水晶の玉を持つて居るのであるけれども、それを態々煩惱妄想と云ふ汚たない
風呂敷に包んで置いたり、五欲六塵の臭さい箱に收つて置くから、その玉の光は顯はれな
い、今それを引裂いて人々持つて居る水晶の玉をむき出して遣るのが、戒師の役目じや、何
んでもお前方が戒法を受けたら充分に持てるだけ持つがよい、只授戒に就くことを樂み
とするばかりではいけない、凡そ人間は道に依つて樂むと云ふことてなければならぬ、イ
クラ窮屈でも道を行ふ場合はそれが樂みになる親が子を教育するのも、子が親に事へる
のも、身躰にはどんな思ひをしても、それを歪ふすることになれば誠に樂みである、食へな
いから盜みをする、そりや樂みにならぬ貧乏して食へなければ飢へて死ぬがよい、それが
樂みである、自分が貧乏の生れつきなれば據ない、その生れついた職掌を樂むがよい、そ

云ふ心掛けて居れば何んでも差支はないじや、即ち出家は出家商人は商人、百姓は百姓、各々その道に背かない様にするのを樂みとするがよい、此節の坊さんたちの中には妻帯を公然にしてとるものもあるが、これは至極見つともない話じや、それで戒師を勸める……それは破戒師だ、釋迦様は今此三界は即ち是れ我が有なり、其中の衆生は皆是れ吾子なりと云ひ亦一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母と云ふて、一切衆生と天地とを御自分の身軀と一つに見て居る、その位であるから世の中の一切のものを憐んで苦みを與へぬ様にしてやろうと云ふのである、今それにその教を傳ふる坊さんか妻子眷族の爲に彼れ是れ執着を起す様では大變な間違である、こんな坊さん達は自分ばかりが罪を造るばかりでなく相手に爲つたものも益々迷ひを深くするのみである、何んでも出家は出家のあるべき様にすることがよい、それが何よりの樂みじや。

それから亦此節の學生たちの遣り方が氣に入らぬ愉快々々と云ふてどんな樂みをするかと云ふと、親が難儀して汗水たらして學資を送る、それにも拘らず酒などを飲んで愉快だと云ふて樂んで居る、何處に一鉢樂みがあるのか、況んや人の物を借りたり飲み逃げしたりして借金などをして愉快とする所が何處にある、學生は何んでも苦んで勉強して居るのがそれが樂みである、前方も授戒に就いたら苦んでもよいから不殺生戒なり不偷

盜戒なり持てるだけ持つことを樂みなさい、十重禁戒の中でも斯うやつて前方が集つて居る時などは不自毀他戒などが尤も大切じや、兎角自分のことの過ちは棚に上げて置いて自慢話でもしたり、亦人の善惡と云ふものは、彼れが斯うとか、是れが斯うとか、好いたとか氣に入らぬとかと云ふことは云ひ易いものじや、そんなことは一鉢餘計なことじや、人にどんなに立派な風をして、運の善い人であるからと云つても、何も羨むにも焼餅をやくにも及ばぬ、何んでも各々の心が清淨潔白に爲つて凡ての物に執着が起つて來ない様になれば、それが何より結構世界に不足が無い様になれば、何よりの樂みである、釋迦様もそうであつた、一切の物に對し執着がないから見るもの聞くもの、我が物の如く平等無縁の大悲を施すことが出来る、是れが何よりの樂み、それ故天上天下唯我獨尊とか一切衆生皆是吾子とか偉らい熱を吹いて居る、自分は三衣一鉢何物も持たぬ托鉢坊主に過ぎない、どんなに尊いと云ふが、衆生は皆我が子であると云ふた所が、中々に尊いのである、何も釋迦様から衣一枚足袋一足貰つて世話に爲つたと云ふことはないのだ、マ途方もないことを云ふ様に聞へるが、其處がそれ、天地同根萬物一鉢とも云ふて、スツカリ執着を離れた境界からは、天地の理に背かぬから天地そのまゝ、我が物と爲つて働かをする、一切の衆生も自分の子と同様に大悲を施すことが出来るのじや。

世の中に執着の多い欲の深い奴ほど可哀い。そんなものだ。今の中に善い加減に欲を離ればよいに、遂には相場などに引掛つて床板まで引つぱがれて了ふ様な騒ぎをする、それであるから佛様や祖師方が涙を流して心配して下さるのである。マ、能くお前方が考へるがよい。どんなに財産家に爲つても、食べるだけは毎日三度づゝに過ぎない。衣類だからと云ふて何枚も何枚も着重ねて居るわけにはいかぬ。金が何十萬圓あつても、自分が獨りて持つては居れぬ。人に預るとか、人を使ふて金を廻すとかと云ふことになる。實は我が物だからと云ふても皆人に任せて心配して往かなければならぬ。そこだから一つ考を大きくして執着を離れ欲を去つて、向ふのものに打ち任せる。國は天子様にお任せ申す。天地は天地に任かして行くから、爰に初めて三界の大導師、三千界我が領分と云ふことになる。是れが所謂天地の法則に背かぬ、これが即ち法性の理と一枚になるのであるから、任かせたなりて我が物になるのである。其處をお釋迦様は三界は我が有なり、一切衆生は我が子である。と云ふたのである。マ、お前方も戒法を受けやうと云ふには執着や妄想を打ち捨て、佛様と一枚の心にならなければならぬ。此考を以て一切の者に對して來ると、愛憐の念が深くなつて來るからたとひ惡人であらうと何んであらうとそれを見たからとて腹などを立つと云ふことはない。たとひ腹を立つにも慈悲の心から起る。即ちコチラの方

には堪忍の力が強く爲つて來る。それが本當の人間の行ひじや、實は惡人に逢はなければ堪忍の仕やうがない。す、惡人に逢へば逢ふほど堪忍の力を増して行く。つまりコチラの道力が堅固に爲つて來るから、自然に天地の理に適ふことが出来る。心に慈悲の力が強ければ、破戒の相に見へてもそれは破戒にはならぬ。菩薩は慈悲の深い所のものであるから、態々破戒の罪を受けても地獄の衆生を濟度したいとの誓願を立て、ごさる。マ、どんな苦みに遇ふとも慈悲の心を忘れてはならぬ。是れが人間の一番の樂み。戒法を受けた功德も爰にあるのじや。

私が中年の頃であつた。或る處に居りました時、根性の惡い雲水が居つて、無暗に人を煽動して惡事を巧む坊主が居つた。朋輩のものが孰れも困つて追出したいと思ふて居つた。私も實は困つたのであるが、だん／＼考へて見れば堪忍の力を養ふにはよからう。堪へるだけ堪へて修行するには、此惡坊主を師匠とするが一番であると思つてやつた。つまりコチラの堪忍の力が強ければ向ふの奴を服することが出来る。何んでも根性の惡い奴ほど、そう云ふものに對して、コチラが一つ堪忍して見る。それを樂みに思ふて世界を渡つて御覽誠によい修行になる。て此堪忍と云ふこともつまり慈悲心より顯はれ出づる處のもの。て人々持つて居る佛性。即ち水晶の玉の光が顯はれ出づるのじや、マ、お前方の心が斯う

云ふ工合くわごうに本心を暗くらまされぬ様に働はたらいて行けばよい是れが所謂戒法を受けた處の功德が顯るゝと云ふものである何んでも人の惡あくむことは能く見へるが自分の惡あくむことには氣きの附つかぬものである殊ことに此口と云ふものは食ふことさへ意地の汚よごないものだからその上に饒舌じょうぜつへると云ふ働はたらきがある、コイツ人に向つて云ふ所のものだからいけないことが多い、まるで口と腹はらとは相違して居る身を養ふ爲めの食物を食ふのでさへもう腹はらの方では口から送り込まねばよいがと思ふて消化力しょうかりきに迷惑して居るのに口の方ではもうチツト食たべたいと云ふ、まるで口と腹と反對して居る實は口ばかりでない凡ての行ひが相違して来る、其處を能く考へて表と裏と反對させぬ様口と心と違はぬ様此戒法の道理に従つて往かねばならぬ若もいものでもそうだ學問したからと云ふて自分の造つた罪が消へると云ふわけではない罪は罪で免れぬものだから、一出來るだけ自分の心は此菩薩戒ぼさつがいに依つて慎んで往かうと心掛けねばならぬ、今戒法にも五戒十善戒とか沙彌戒とか比丘戒とかあるが是等は只人天の果報を得たり羅漢の悟りを得るまでのことじや、今此菩薩戒ぼさつがいは盡じん未來戒みらいがいと云ふてたとひ地獄に往かうと極樂ごくらくに往かうと此戒を持たうと云ふ心があれば佛果ぶつぐわに至るまで即ち佛ぶつに爲つて佛と同等の誓願せがんを立つる様になるまで此戒法の功德は離れぬたとひその間戒に背くことがあり修行しゆぎやうがみじくであつても心で此れを

破らうと云ふ量見りやうけんがなければ、今身より佛身にぶつしんに至るまで盡じん未來際みらいがい決して授戒の因縁功德は失はぬものである、それで先づ此戒法を受くるの順序として、初めに懺悔ざんげの文を唱へ、それから三歸戒さんきがい三聚淨戒さんじゆじやうがいと都合十六箇條を授くることになるのであるが、まあ今席はこの位にしてをこふよ。

其 四

佛教渡來してより、茲に千有餘年、而して其衰微不振そいびふちんの状態、今日の如く甚しきはなかるべし、就中我が曹洞宗の如きは、其尤も甚だしきものなれば、老僧宿徳の輩は言ふを待たず、將に立つて幾年精磨砥礪しんかうていりやくし來れる大手腕を、この有望なる佛教界に揮はんとする青年教家は正に篤學力行益々其度を増さずんばある可からず、今日の佛教は過去の佛教に非ず、將來の佛教は必らず今日の形態を存せざるべし、社會の開明に赴き人智の益々進むに連れ、佛教界も又大に覺悟無らざんばあらず、世は月日と共に變化し、人は流水と同じく推移して清新ならんとす、豈あに空寂として過す可けんや、見よ我宗は今日のみ時世に後れ、人智に伴ふ能はざりしは已に非ず、徳川幕府時代に於ても同じく歩調遅々牛にだも如かざる有様なりき、例へば夫の駒込の吉祥寺の學寮の當時を想見せよ、學寮の其當時に於ける位地は今日に於ける洞宗の大學に彷彿たり、然るに人呼んで吉祥寺の學寮を乞食學校と稱

したりき、天台眞言、浄土等の諸宗が隆運一世に冠たりしに、何故に曹洞宗が斯かる窮境にあるか、先づ日本に佛教の渡來して、この日東の島帝國に宗教なる根底を固めし所以を考ふるに、法相三論の南都に繁榮を盡し、天台眞言の平安に隆盛を極めしも、現世の利益、一生の福樂を主と爲せる祈禱、佛教のみなりき、天台にして鎮護國家、皇室安全の祈禱を比叡山に於ても、眞言にては東寺西寺高野山等に於て同じく現世利益の祈禱を修したりし也、如此く佛教が鎮護國家や皇室安全の祈禱を主とするが爲め、従つて皇室と親近し大臣鉅卿に接すること繁し、故へに其勢力を爰に得て、其尊信崇敬を受くること亦た少なからざる也、此等天台眞言等の隆盛の由つて來りし理由は既に此に在り、是を以て此等の諸宗が一朝衰退して、餘瀝だも止めざるに至るの時機は即ち他にあらず、皇威式微し、帝政陵替したりし時なりき、一世に豪奢を矜りし藤原氏衰へ、帝政は保元平治の亂を経て鎌倉幕府の時に至り、一國の政權武門の手に歸するに至つては、流石南都に威を唱へ、北嶺に榮を擅にせし天台眞言等も一朝にして萎靡振はざるに至り、單に都の一遇に屏居し、如此く帝威衰へ、武權日に盛んなるに従つて、現世利益を以て目的とし、祈禱加持を以て其勢力を維ざし、宗旨は頓に形勢を顛倒し、遂には榮西禪師の興禪護國論となり、日蓮大士の立正安國論を生ずるに至れり、榮西の禪を唱へしは純粹なる禪にはあらずして、密宗を兼ね律宗を包み

たる國家主義にして從來の天台眞言に抗したり、然れ共我國に於ける佛教諸宗の衰退興隆の由つて來る所を考へよ、宗旨にして皇室に寄り、幕府に倚托して、權威の集まる所に附隨せしものは皇威の陵替し、幕府の衰亡するに従つて其宗旨も其運命を共にするの止むを得ざるに至れり、是を以て高祖承陽大師は天台にあらざり、眞言にあらざり、また禪にもあらざる眞の佛法を開かんが爲め、平安を避け、鎌倉に倚らず、國王大臣の力を假る事なく、一個半個共に是れ佛種を具有す、安心立命は貴賤上下の別あることなし、故に盛衰と共にすべし、國王大臣の力を假らず、而も國家を以て主義とせる佛教を排し、人烟稀疎、紅塵未到の地なる越前の深山幽谷を下して、眞箇佛陀傳承の佛法を布き、玉ひけり、且つ京都鎌倉に於て一種特創の宗旨を唱へたらんには、比叡高野は必然的に敵として迎へざる可らず、由來高祖は教義の優劣を論じ、教勢の強盛を望み、玉はず、只管に眞箇の佛教を開かんと志望を存じ、玉ひしかば、北海の邊土、否な越前の僻陬に自己の佛教を鼓吹し、玉ひし也、故に後世に至りて曹洞土民の稱呼すら起るに至りき、斯く我宗が民間に布教するに専一なりしが故に、爭亂戡定一國平和となるに及んで、諸國に割據せる大名は曹洞宗を尊信するに至りたり、是れ洞宗が權門に倚り、隆盛をなすの第一楷梯也とす、しかし曹洞宗は大名の歸向尊信を得るに従つて、開立當時の意志は一變して、多大の食祿に衣食し、京童をして、天子天台、公

卿眞言淨土公方に曹洞大名なる語を發せしめたり、是れぞ此れ曹洞宗が來るべき衰微の運命なる徑路に、第一步を入れし時也、元和偃武以來德川幕府が確かに日本の政權を掌握せしより、德川幕府否な德川宗家及び三家三卿等が淨土宗を尊信せしが爲め、淨土宗が大に勢力を得ぬ、増上寺等各國に散在せる淨土宗は多大なる勢力を扶殖して、政權奉還の時に至るまで其形勢を保持したりき、しかく我宗は一旦衰微の悲運に陥りしより、其餘勢は延いて今日に及び、吉祥寺學寮は遂に乞食學校の稱を得たりぬ、其學寮の組織は國々より學僧を入寮せしめ、其中に於ける優等者を寮長とし、自立生活を以て銳意勉學せり、學僧は各自托鉢して苦學研修し、學殖の豊富ならん事を力めたり、斯くの如く赤貧にして苦修辨道の結果は當時の學界に一大勢力を形作り、都門に於ける漢儒をして其力を試むる試金石たるの位地を得たり、彼等儒者も吉祥寺の學寮に來り講じて、多少の名聲を得るを以て満足し、亦た來り講ぜんことを請ふときは喜んで其請に應じたり、學寮の組織こそ不完全なるも其勉學の點に至つては嶄然頭角を學界に現はし居りしを以て、かの面山、良悟、卍山の如き碩學高僧輩出して一世を風靡せり、然れ共此等の碩學は單に學究的方面のみを以て満足せず、實參實究の最も必要なるを感じて大に其方面に力を盡せり、良悟の如きは、山上有入谷有水、林間尤好養殘生の語を見、豁然として、明窓の下、淨几の邊を去り、白雲

す深山に柴門を叩き、~~牙~~へ響ける幽谷に水を掬し、浪靜かなる清涼池に菩提一圓の月を看取すて、實踐的方面に向ひたり、彼等碩學はこの赤貧無窮なる學舎より産出されたる、風雜たり、將來學途を攀んとする青年は須らく這般の機微を洞察するの明を有し、身は一個の素朴漢、弊衣垢面なるも心に懸くることなく、思考を沈着にし、氣象を高潔にし、而も志望を雄大にして専心勉學するの大覺悟を要す、世多くは事物の華麗ならんことを欲す、然れども學に在るものは必ず華を去つて實を取るの主義を懷抱せざるべからず、多くの金銀を消費して校舎を壯麗にし、器具を完全し以て有爲の材を産出せんとは、固より容易なり、是の如きは我宗現今の状態にしては望み得可からざる事なれば、宜しく、駒込學寮時代の形勢と今日の性態とを比較して大いに考察せざる可らず、諸子がこの雄大崇高なる氣象を以て、學成り、業治まつて後に社會を爲すべき事業は多大殆んど數ふ可らず、而も其中に於て最急にして最要なる事業は布教傳道、即ち是れ也、拾數年前より我宗に於ては修證義を以て、布教傳道の根源となせり、先づ修證義は懺悔滅罪、持戒入位、發願利生、行持報恩の四と爲す第一懺悔滅罪をば何んとか思惟するぞ、懺悔には作法、取相、觀無性の三種あり、吾等若し滅罪せんと欲せば先づ懺悔すべし、罪障は内にあらず、外にあらず、亦た中間にあらず、宜しく罪障の根源を透視し、罪過の自性を知得せよ、這間の大道理を發得して始めて法界

一如唯一乘法なる眞義を知ることを得ん吾等にして罪を視て後懺悔せんとするか如きは到底懺悔し得ざる也懺悔は佛法に於ての難事也罪と我との區別なく彼我の相對を絶して始めて懺悔の實を得故に懺悔滅罪とは入佛法の一大事なり輕々しく之を解す可らず次に持戒も是れ亦た佛者の一日寸時も忘るべからざるものにして古徳曰く佛法の七分は戒にありと戒は一彈指の間一刹那の間も守ることを得ば其功德廣大にして滅せざる也戒には受法あつて捨法なし然し還羅には捨法ありと云ふそは兎も角も梵網經及其他諸經論には受法あつて捨法なしと説けり戒は功德必ず永久に滅せざる可し戒には傳受發得生得の三種あるも今茲に細説せじ。

靜かに思へ發願なき佛祖なく行持なき佛祖なし發願は佛祖の慈愍行持は佛祖の心操迦葉大士は鷄足山に跡を隠すに至るまで終世十二頭陀を行じて止まざりき是れ迦葉の行持なりと我が高祖は迦葉大士の心操を賞し玉へり將來繁雜なる人生に處して爲すこと有らんとする者は其本とする所を養ひ其行を高潔にして世の風潮に流れず世の塵埃に染まずして其志を行ふべし今後我宗は何を以て立つべきか何を以て利生すべきかは諸子が考ふべき問題也月舟山は授戒を以て利生濟度するの難きを知り一念の間一念の發所に於て安心の機あるを知るべし權勢に倚れる台言諸宗の衰滅を見て善く其間の

狀勢を知るを要す是れ我が諸子に囑する所の一大事因縁なり諸子善く之を勵めよ。

洞上信徒安心訣

吾宗教導に従事する者、信徒安心の教導に苦しむもの多し、と是れ何が故ぞ、向上の語頭に轉ぜられ或は文字の學解に汲々として、自ら佛法の信ずるの淺き所以なり、佛法を信ずること淺きが故に、宗祖の道に參ずることも亦疎なり、宗祖の道に參ずることの疎なるは何が故ぞ、これ他なし、近世に至りて行解一致眞實の正師稀にして、行解相應ぜざる邪師のみ多きが故に、參學隨徒のものも亦た眞實參學の志を起さず、たま／＼其行を信ずるも其解を疑がひ、其解を信ずるも其行を疑ふ、半信半疑にして修行親切ならず、故に師家面前に於て拋身捨命の活機輪を轉ずることなし、拋身捨命の轉機なきが故に、身心脱落せず、脱落の身心現前せざるが故に、凡情轉ぜず、たとひ經論古則拈提講演を開くも、みなこれ妄想分別の義解のみなり、回光返照の自修力なし、その半信半疑の緣影裡に彷徨して、信心堅固ならず、三業不淨にして、慚愧なきもの、漫りに名利を貪り強て戒師となり、或は布教師となるならば、何に依りてか他の疑團を破り、安心決定せしむることを得んや、余深くこれを憂ふること久し。

吾宗參學の辨子、投機轉處の一著を欠くも、歸依三寶の一念信を堅固にして、身口意業の戒

を持するとき、人天の導師たるに足れり、金言已に證あり、佛示周利盤特曰、守口攝意身莫犯、如是行者得度世、と又、山和尚人に示して曰く、三學の中たとひ知見未開も深く慚愧を知りて定を修し戒を持するとき、は佛子たるに恥ぢず、と是れ佛意と異なることなし、余已に憂ふること久し、ふして容易に筆を操らざるものは何ぞや、今世文字の學者、細素ともに多く、諸説雜論、稻麻竹葦の如し、此時に當りて學徳薄く又一宗に頒布して規則と成さしむるの位置にあらざるもの、漫りに筆を勞し却つて他の誹を招くのみ、決して行なはるゝことを得ず、空しく他の覆醬を充んのみ、更に益なかるべし、故に口を緘して敢て發せず、唯平生教導するに於て、私に心を用ゆるのみ、然るに今年七十、殘喘旦夕に迫る、故に二三子類りに安心起行在家教導の法語を乞ふ、婆心胸に溢れ、終に十條を記して與ふ、これを以て足れりとする勿れ、親しく高祖の道に參じ、深く佛意を探つて、接衆教導に過ちなからんことを望むのみ。

第一

此の娑婆に生れ、受け難き此の人身を受け、値難き佛法に遇ふ、實に我等が幸福なり、此身今生に向て度せずんば、何の處に向てか此身を度せん、然るに纒かも安心の處を得ずして死するものは禽獸と何を擇ばんや、安心を得ること實に易し、唯是れ吾身心を拋捨するのみ

抛捨するや、又難きにあらず、深く三寶を信して、確乎として、一念歸依するのみ、之を翻邪歸正の三歸と云ふ、是れ參學人の轉機投入と異なることなし、一念歸依するときは身心佛法と成り了る、之を身心抛捨と云ふ、我等此身心佛法となるとき、國土は淨土となり、行は佛行となり、治生産業みな實相の法門となるなり、是れ則ち即身即佛娑婆即淨土にあらずして、何ぞや、然らば即ち信心決定して、南無歸依佛と一聲唱ふる處に佛體具足すると決定すべし、合掌唱名の形は直に佛行なるが故に、生々死々身は是れ佛子、十方世界到處は是れ淨土なりと信して決して疑はざるべし、信心決定して一聲唱ふる處に業障懺悔の意も、上求下化の菩提心も含攝して餘蘊なければなり、只一心に南無歸依三寶と唱ふることを要するのみ、信は道元功德の母なり、此信の一字より入るべし、梵網經曰、大衆心諦信、汝是當成佛、我是已成佛、常作如是信戒品已具足也、然るに信徒を接するに於て、二門を分つべし、一は學理より入る者、一は信心より入る者、學理より入るものは坐觀究理を專とし、信心より入るものは安心起行を專とすべし、今安心起行の徒を攝するを以て宗とす、坐觀究理の徒は師家の家風に依て攝得區々たるを以て茲に論せずといへども、畢竟信心堅固安心起行に至ては異途なかるべし、古人云く、行立て、智忘ずと是れなり。

第二

安心決定ののち起行怠らず常に三歸戒を唱ふべし、其三歸戒を三寶と云、其の三寶中の一寶に自ら三寶を具するの道理あるを以て、唯南無歸依佛と唱ふるも亦妨なし、我常に之を教え、此歸依佛の一唱に諸佛を具するを以てなり、南無釋迦牟尼佛、南無阿彌陀佛、或は常に信する處の佛菩薩の名號を稱すること妨なしと雖とも、我宗祖の示す處に依れば、從今身至佛身、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧と唱ふるに如くなかるべし、而るに此娑婆國土に於て、南無歸依佛と稱するは、即ち釋迦牟尼佛なりと決心し、而して諸佛を含むこと、信すべし、如何となれば應化出現の大恩教主なればなり、稽首恭敬して且く諱を避て唯南無歸依佛と唱ふること、心得べし、縱ひ人々常に信する所の佛菩薩の名號を稱するも、又經陀羅尼を誦するも、先づ正に三歸戒を唱て而して後に餘の佛菩薩の名號を唱ひ、又經陀羅尼を誦すること、本式とす、一念決定の信者は唯三歸戒のみ、三遍十遍百遍千遍乃至數千萬遍に至るも、根氣に應じて唱ふべし、從今身至佛身生々世々值遇頂戴受持護念すべし、吾高祖正法眼藏道心卷に曰く、マタコノ生ノヲハルトキハ、フタツノマナコ、グチマチニ、グラクナルベシ、ソノトキヲ、スデニ生ノヲハリトシリテ、ハグミテ、南無歸依佛ト、トナヘタマツルベシ、コノトキ十方ノ諸佛、アハレミヲ、タレンサセタマフ、縁アソテ、惡趣ニオモムクベキツミモ、轉シテ天上ニウマレ、佛前ニウマレテ、佛ヲオガミ、タテマツリ、佛ノトカセタマウ、ノリ

ヲキクナリ。眼ノマヘニ。ヤミノキタランヨリノチハ。タユマズ。ハゲミテ。三歸依ヲトナヘ。タ
 テマツルコト。中有マデモ。後生マデモ。オコタルベカラズ。カクソゴトクシテ。生々世々ヲツ
 クシテ。トナヘタテマツルベシ。佛果菩提ニイタランマデモ。オコトラザルベシ。コレ諸佛菩
 薩ノ。オコナハセ。タマウミチナリ。コレヲフカク。法ヲサトルトモイフ。佛道ノ身ニソナハル
 トモイフナリ。サラニ。コトオモヒヲ。マシヘザラント。チガフベシ。夫唯一心に三歸戒を唱
 ふるときは必ず地獄に墮せず、永く惡道を離れて終に佛身に至るべし。

第三

佛已に成佛のとき、我等を以て、皆是吾子との玉ひ、又有情非情同時成道、草木國土悉皆成佛
 の證明あり、何の疑ふ所かこれあらん、たゞ是れ邪師に惑はされ無明に酔ふて安心決定せ
 ざるのみ、宗祖曰く、四土に具はる我等と是れ佛の四淨土の外に行くべき路なきことと決
 定すべし、ありがたき御言葉なり、身心に銘じて忘るゝこと勿れ。

第四

身心抛捨し信心決定して法界を一觀せよ、我等各々平生の爲す所はみなこれ四恩に報ず
 るの行作なり、農事、商法、營業仕官、行住坐臥、喫茶、喫飯に至るまで、國恩に報じ、父母に報じ、三
 寶に報じ、衆生に報ずるの行業にあらざることなし、身心抛捨の一念決せずして、人我名利

の爲に修するときは、坐禪誦經、禮拜供養、稱名に至るまで、皆是俗事世間有爲の行作にして、
 無明執着を長ずるのみ、解脱の道に於ては遠して遠し、身心抛捨信心決定の後、は事々本源
 に達し、物々解脱の法門となる、若し一旦決定するも無明に障へられて疑念起るときは、直
 に三寶を念すべし、正念自ら起らん、妄想煩惱起るときも亦復かくの如し、唯究理の偏見の
 みにて信心薄弱、空腹高心の邪師に參ずるは、却て邪見に墮す、參せざるに如かず。

第五

安心の二字、吾宗に於ては、二祖不可得の話を本とすべし、五燈會元に曰く、卷の上六十丁、
 曰有僧、神光者、曠達之士也、久居伊洛、博覽群書、善談玄理、每歎云、孔老之教、禮術風規、莊易之書、
 未盡妙理、近聞達磨大士住止少林、至人不遙、當造玄境、乃往、彼晨夕參承、祖常端坐、面壁莫聞、誨
 勵、光自惟曰、昔人求道、敲骨取髓、刺血濟饑、布髮掩泥、投崖飼虎、尚若此、我又何人、其年十二月
 九日夜、天大雨、雪光堅立、不動、遲明積雪過膝、祖憫、問曰、汝久立雪中、當求何事、光悲淚曰、惟願和
 尚慈悲、開甘露門、廣度群品、祖曰、諸佛無上妙道、曠劫精勤、難行能行、非忍而忍、豈以小德小智、輕
 心慢心、欲冀真乘、徒勞勤苦、光聞祖誨、勵潛取利刀、自斷左臂、置于祖前、祖知是法器、乃曰、諸佛最
 初求道、爲法忘身、汝今斷臂、吾前求亦可在、祖遂因與、易名曰慧、可曰、諸佛法印、可得聞乎、祖曰
 諸佛、法印、匪從人得、可曰、我心未寧、乞師與安、祖曰、將心來、與汝安、可良久曰、覓心了、不可得、祖曰

我與汝安心竟

二祖安心は是れ身心抛捨の時なり盡天盡地十方世界一聲に吐露して不可得と云ふ是即脱躰現成本來の面目現前の時節なり娑婆即淨土即身即佛更に餘蘊なし故に初祖證明して曰く我與汝安心竟と然るに唯文字の解を爲すものは不可得を以て管に空無の思をなす可愍佛祖單傳見性成佛の宗意を知らざることを

第六

他土の往生他力成佛を勸むるものは吾高祖の本意にあらざるが如し彼の學道用心集に云はずや或教人願他土之往生惑亂起于此邪念職于此又云好道之士莫志易行若求易行定不達實地必不到寶所者歟是れ吾宗祖の意敢て他力往生の淨土門を誘るにあらず宗旨建立の異なる所以なり縦ひ他土の往生他力成佛の教も信心起らざるものは尙ほ疑て決定せず古人云他力稱名も難信の法なりと佛縁の薄きものは自力他力共に疑ふ是れ難化の衆生なり佛出世するも如何んともしがたし是の如きの衆生は唯佛縁を結びて遠く得道を期するより外なかるべし可愍哉

第七

已に是れ佛子なり須く佛心を發すべし佛心とは何ぞや上求下化の菩提心なり已に菩提

心を發せば須く佛行を行すべし佛行とは何ぞや身口意清淨にして先づ十善業道を行すべし苟も三業清淨なれば生じても安心死しても安心寐ても安心起ても安心なり其安心起行の中に自ら他を化するの功德あり此の安心の法を捨て五欲六塵へ走り破戒無慚放逸無愧なるものは實に夏蟲の燈火に投ずるが如し菩薩日々涙を澱ぐ所以ある哉

第八

高祖曰く悟りと云ふは自己を悟るなり自己を悟ると云ふは自己を忘るなりと是れ自己を忘るとは身心抛捨の謂ひなり苟も自己を忘せざれば他力往生の一念も決定すること能はず我を忘れて稱名するときは我れ彌陀となり彌陀我となる彌陀と我と一轉無二にして彌陀と我と共に解脱し直下に往生すべし何ぞ淨土娑婆の隔てあらんや法界一如生佛不二なり若し此の意を會せば自力他力の論自ら盡ん實に十萬億土去此不遠なり唯其宗旨の教に依て急ぎて信心決定すべし自力他力優劣得失を論ずることなかれ

第九

三界無安如幻草露の身なれば何れ捨つべき命なり捨つる所を急ぎて決定すべし名利有漏の波浪に沈めんか五欲六塵の糞土に抛めんかわれは思ふ何れ捨つべき命ならば佛法無漏の大海に放擲すべしと惜めども惜み遂ぐべき命にあらざるが故に急ぎて決定すべし

高祖曰く、三歸依是れ依止なり、四念住是れ住處と高祖の金訓誰か肌に銘せざらんや。

第十

恐るべし、恐るべし、恐る可きものは因果なり、微塵も味ますことなかれ、毫釐も欺くこと勿れ、因果を味まし因果を欺くときは安心決定の妨げ、臨終正念を得ること難し、若し誤て味し誤て欺くときは業障懺悔すべし、自ら非を覆ひ自ら非を飾ると勿れ、生死事大無常迅速、時不待人、可愼可愼、吾宗信者の安心唯身心拋捨歸依三寶の一念信心に在るのみ、然れども先入主となつて一佛の名號に歸せざれば安心決定しかたしと思ふものは、専ら西方極樂世界阿彌陀佛を念して、彼の淨土に生ずることを願ふも亦妨げなかるべし、然れば則ち自力の徒は止觀理入を正道として、他力の淨土門を助道となし、又他力淨土門を正道として、自力の止觀理入を助道となす、相助成して菩提の道に入ること、古人例あり、妨げなかるべし、俱に佛說修多羅の法なれば、自宗他宗の僻論を爲して相誹謗すること勿れ、一代藏經は吾西天の初祖摩訶迦葉尊者への佛付囑にして、吾宗は佛法の總府なりとは、天童淨祖吾高祖への誨示にあらずや、故に吾宗徒は一經一論一佛一體に偏倚すること勿れ、身心頓に佛海に投じて唯一心に南無歸依佛と唱ふることを要す、敢て往生淨土を願ふに及ばず、唯一心に唱ふれば十方の諸佛自ら憐みを垂れ攝取せられて、必ず惡趣に墮せず、終に成佛の因

となるべし。

今此安心訣は二三子の求に應じて未發菩提心の難僧及び吾信者の安心歸着に迷ふ者の爲に、敢て大方に示すの意にあらず、故に簡單卑近を要とす、闕者諒之。

維時明治庚寅四月

禪床閑話

禪床閑話

此時を逸してはならぬ

老耆も今年は八十五歳になつた。逝てかへらざるものは、ゆく川の流れと人の歳のみぢや、やれ日露戦争も段々長びくであるが、これにつけても國家の負擔と國民の要心とは實に容易でない。何んでも國民は衆心一致して氣を長く持つて根氣負をせぬやうにやつても、らはなければならぬ。ソコで本宗の僧侶たちも至誠に布教興學すべきは此際である。必ずこの時を逸してはならぬぞよ。此時、此際

上四恩に報じ

下三有を資くと云ふことを實際にやつてくれねばいかん。折角僧侶となつて參禪勉道したとて、雲水を世話したり、布教に盡力せなければ、何の所證もありはしない。全體雲水を世話すると云ふことは、なか／＼難事である。これにつけては第一に自己で勤めて、かいらねばならぬ。自分の身の衣資を節約ねばならぬ。ソウして、やかましく云ふと、雲水には嫌はれるし、サまづ通常の話から云ふと、實に馬鹿々々しいやうなものだから、今の人たちは、自然

雲水を世話するものが減るわけなのである。ヤッぱり

金を蓄めて

身を樂にして、うまい物を食べて、横着をしてゐる方が好いだらうよ。老耆は若い時分から外の事は得仕なかつたから、貧乏をしつゝ、雲水の世話ばかりして居たが、妙なもの、ドウにか、こうにか、食ふことには困つたこともなかつたが、これからは世の中が追々とせまづてくるに就けては、さぞ困るものが殖えてくるかもしれない。随つて布教費などもだん／＼減少するやうなこともあらう。サアかうなつてきたら、

實地に勤めるより外は無

虚飾的や、言論的の布教では、とても人々が感心するものでないぞ。人々が心の底から感服するは、外の事ではいけない。眞の佛法と行ふ眞僧でなければならぬ。だから尊前たちも此の時機を逸せぬやうに、充分奮發して眞の佛法を行ふ眞僧のまねでもして、くれるやう、かへす／＼もたのむことである。

禪床閑話

居士等の精進

ドウモ今日此頃拙禱の處へくる居士等の熱心には驚き入ったよ、わしが牛込の清久寺に居たころ澤山居士等も来たが、中にも威心なのは參謀本部へ出る、ごく卑い身分の男で、なんでも日給三十錢とかもらうてをる人であつたが、四ッ谷から毎朝三時半に起きて、曉天の坐まで遣りにくる、ソレでそんな少ない日給で自分の身仕舞いから飯まで喰ふのじやから、随分苦しいのじやらうが、五圓と云ふ金を出して供養をした實に威心なものではなにか併し此人などは特別だが、其外にも、所々の役所や何かに出て居る立派な官吏などが、瀕りに參得にきて夜坐までつとめて歸つたものが澤山にあつた、ドウも居士等がかく熱心であるから拙禱等も安閑としてはいられないよ、それが坐禪ばかりでは無い同じ佛典を聽きに來ても

頭の丸い連中

よりも居士等の方が餘程勉強をする、何故かといふと僧侶の方は、専門の書籍に書き入れをしゃうとか、開書をしやうとか云ふ有所得の心があつて聞くものじやから、コノ點が違

不立文

字一眞

意言

得々佳

ナリ予

即座

嗚呼

つてゐるの此字義が解らぬのと、八方へ氣を揉んでゐるので、肝心の宗意を聞取ることが出来ない、トコロが居士等の方では別段これ聞いて直に人に講義してやらうと云ふ様な野心がなく、唯黙つて聞き、聞いて味つて往く、少しも有所得の念を狭まぬから、却つて本文に執着せぬだけ、眞實の勉強をするやうぢや、ドウモ字を覺へたり、書き入れをする氣で宗乘をさかされては、拙禱も實は迷惑千萬のことである、所で、拙禱は居士等に外の道樂をするよりは

謠曲の稽古

でもしたらばよからうと謂ふて教へてやつた、ドウモ無益らぬ道樂をする氣になると、煩惱や妄想が起り、却つて參禪の邪魔になることであるが、謠曲などは音聲をだすのに悠然と構へこんで、ジ、ツと落付かなければ、旨く出来ぬものじやから、大層坐禪の補助にもなりさうだ、イヤこれは居士ばかりではない、若い僧侶等が夜坐の時に、モウ厭きてしまつて、坐禪儀を讀むときになると、ヤレ嬉しやと安心して、睡り半分に、奇妙な聲で誦まれるのは、實に聞き苦しい、お互に氣をつけんければならぬことじや、ソレに大飯でも喰うてあぐひでもされると、猶々聞き苦しいものだから、居士等にも恥しいやうだ、あゝいふ人たちに、すこ

し謠曲でも稽古させたらばよからうと思ふが、どうじや、ソコで當今の商界についての觀察であるとな實に此頃の世の中は何ともいひやうがない、世の中の摸範となる僧侶がみんな信心もなく、道心もなく、たいモウ無暗のことばかりしてゐるやれ

鐵學の眞鍮學

の窮理學の茄子學のと種々研究をするはよいが、初めから腹が据つてゐないから、マルデ信心と云ふものがなく、却つて外の學問に氣をとられ少しも法のためにはなりはしない、殆ど素人が植木をうるた様で幾日経つてもサツパリ根が堅まることがなく、風が吹けば倒れ、雨が降れば倒れ、起すと直ぐに又倒れて、つひには枯れてしまふばかりだ、今の様な鹽梅で何年も續かうものなら、前等の死ぬ時分には、佛法の樹が倒れてしまふかもしれんよ、なるほど佛法は潰れもしまひ、

お經は整然

と殘つてをるだらうけれども、今の漢學のやうじや、書物は諸方で勉強するし、講義も大勢

がするけれども、モウ今では眞箇の儒者が無くなつてたれ、一人孔子の説を主張するものがないと同様佛學の研究ばかり盛になり、之れを擴めて佛の本意をのべるものがないことになるかも知れぬ、何でも道心を養ふて眞箇に佛法の味をみるのが肝要じや、ドウ考へても

道心のない者

は駄目だ、道心のないものに佛法を聞かせるのは、油紙へ水をかけるやうなもので、一時は濡れても、これをふるへばすぐに乾いてしまふ、道心のある者は、生紙へ水を落とすやうなもので、たとへ滴くが落ちても直にシツトリとなる、ドウしても無道心の僧侶はいくら澤山にあつたからが、チツトも役にはたちませんよ、

人間は護膜球

拙齋も大分年が寄つたよ、だがナ、ニ氣樂にして居れば百歳までも生きられぬこともあるまいけれども、寝て暮すくらゐなら、いつを死んだ方がましだ、人間と生れて仕事をせず、に生きてゐるほど馬鹿げたものはないから、拙齋も若い時分には一日に十里ぐらゐ歩

いても何んともなく宿屋へ着いて一杯グツと呑めはすぐに疲れも消えたものだが此頃はすこし遠い所へ人力車で行つても直に疲勞してしかたがない人間は、マルデ護膜球のやうだ新しい時には少し延してもピンと弾ね返るが古くなると延びたららびたなりて容易にもとの通りにならん拙者も古い護膜の様になつたことはなつたけれども、マダマダ死なない中は、徒暮す様なことはせぬつむりじやわい、

佛法の將來

佛法の將來か、ソレはモウ駄目だ、今の坊主共がイクラ騒いだつて何の効もありやしない、寺は澤山ある坊主も大勢居るが肝腎の道心と云ふが念頭にないのにはこまる葬式や法事は始めから商賣のやうに考へた寺があるから寺に住んでゐるだけで何の仕事も仕様と思はない、信仰がどうの宗教が何うのと、理屈はいくらでも云へるけれども、眞實の道心にいたりては、全く塵程もないのだから仕方がない、佛教の第一は無常を觀ずること、無常を觀して佛法に入り、眞實の道心を勵まして出家得道の本意を貫くのが坊主だ、今の坊主は何が道心だか、何が佛法だか知りやしない斯様なことでは眞實の佛法が盛んにな

つてゆくべき筈はなし、

志が篤い

勿論昔しの坊主だつてエライ坊主ばかり居たのではない、随分馬鹿者もあり佛とも法とも知らぬのが澤山にあつたに違ひない、しかし今日の坊主のやうに無道心のものはあまりなかつた概して志が篤いと云ふことがその特色であつたが、それが今日の坊主ときてはみんな無道心で無闇に學問ばかりしたがつてゐる、學問も結構ではあるが無道心の寄合ひては佛法の前途が案じらるゝばかりだ、昔しの坊主は名譽を望んで頭を剃つたり修行をするさへ俗僧だと云ふて非難したものだ、昔しの坊主は欲を斷ち名利を棄てて修行にかゝるのだから、何と云ふて樂みもない、まあ名譽でも食ふ位が一番の道樂であつたのだ、昔から高僧となつた者には大分名譽を得たいばかりに頭を剃つたものもあつた、それも實は人間に位付が喧かつたので、坊主の外の者にした所が兎ても立身が出来なかつた、武士にしても平民にしても公卿様や上つ方の人々とさへ話が出来なくつて中々情ない有様であつたから、人の上に立つには坊様になつたのだらふ、然し此様の坊主のことは大抵名聞坊主と悪く云はれてあまり人は褒めなかつたのだ、ところが今の坊主はどうだ、名

聞を好むぐらゐは、まだしも名譽などを望むなど、高いことは云ふ暇がない俗人にも劣る真似をして、たまたま衣をはまつた所が

狼に衣を着

せたやうなもので、一枚脱がせたら直に無道心の正躰があらはれてしまふのだ。此間も或人に話したことがある、多分これからの坊主は昔の修験者のやうになるだらう、修験者は平生は俗服をつけて百姓もする商買もする、さて御祈禱となると直に威嚴のあるやうなものを着て祈禱にとりかゝる、ドゥッ、これからの坊主は、コンナものだらう、魚も食ふ、女房も持つ、それで讀經の時だけは法衣をつける、此邊が上等の處さ、道心もあつたものじやない、ツマリ坊主は商賈になつて、信仰も歸依も一層薄くなり、佛だか法だか分らなくなるに極つてゐるのぢや、

佛法の儀式

けれども世の中は妙なもの、またこの魔りきつた坊主の中にも、時々エライ人間が出来るかも知れんから、スツかり手も足も出なくなるやうになつたらば、佛法興隆の精神でも

持つて働くものが出来てくるかもしれない、入壽十歳までちまつてくると、忽ち一念發起するものがあつて、遂に八萬歳の壽命を保つにいたると云ふことが御經にかいてあるから、佛法の墮落もドン底まで往つたらまた盛りかへしてくるかも知れぬ、まあ今日の處では佛法はなくなつて儀式が残つて居るばかり、佛法も儀式の中に生命をもつて居るのだが、今の若い連中は其儀式まで輕んじて居るから、其儀式が衰へた日にはもう佛教なんぞは無くなるに極まつて居る、

無住の寺が殖る

だがまづ、これはズット遠い話で、何も今直に佛法が衰へて了ふと云ふてもあるまいが、何より先きに心配になることは、寺院が無住になることだ、今日澤山にある寺院が、残らず金持と云ふ譯でもないから、随分貧寺もある、スルト其貧寺へ住職するものは誰れだと云へば、ヤハリ若い坊主じやが、今の若い坊主は、ドシ、ノ、學問が仕込まれると、懐はどうでも氣ばかり高くなつて、眼ばかり上の方へ付けているから、兎とても田舎の小寺などへ、蹲つて檀家の相手などをして、いられなくなる、小學校の教員になつても、小寺の住職より都合がよいと云ふ精神になるから、三十や四十の檀家を相手にする住職は、全くなくなつてくる、

中學林や大學林を卒業した者に小寺の住職を勤めさせるのは、實に無理なやうなものぢや、そこで無住の寺が殖てくるのである。

無道心の死骸

まづソコであるから隣寺の和尚に兼務をたのむ、少し兼務の味を覺えると、檀家も面倒はなし、其和尚も捨てたくないから、何時までも兼務をする、自然住職がいぬから寺が荒れる、コレでは佛法の隆盛は望むことは出来ぬ、されば、あまり利口の坊主は、こしらへぬ方が可い、かも知れぬ、何にしても、困つたものぢや、だから、前途も無道心の馬鹿な坊主の中にだつて、道心ある坊主となるやうに心掛けるのが肝要ぢや。

華嚴經の中にだつたか、船が覆がへつて、皆衆が助からずに水死したが、其中たゞ一人、岸に着いたと云ふ聲が出て居た、今も其通り、世間の坊主共は無道心の死骸ばかりだ、から、其中たゞ一人、眞實の佛法を護持して往かうと云ふ精神のあるものがあれば、其の馬鹿坊主を踏臺にして、思ふやうなことが仕遂げられぬ限りもあるまい、併し何にしても、心配なことだ、世の諺に、古佛去れ、新佛來れと云ふが、古佛はドン／＼去つて往くけれど、新

佛は中々來ない、きた所で、其新ブツは佛ではない、新物だ、新しい物が出來てくるばかりだらうよ。

管長は飾り物

一、鉢、曹洞宗で管長巡化規則なんかと云ふものを設け、抽袴のやうな此老僧を、ヤレ授戒だ、ヤレ説戒だ、と引き廻さるゝことになつて居るが、こんな馬鹿なことはあるまい、説教や授戒は若いものにさせるが普通だ、此年になつて爺や婆を相手にして説教したとて、何の甲斐があるものか、祖録の提唱を、すゝめ、か、本山僧堂の雲水を説得すると云ふことなら、まづ結構じや、が、本山へ出る前は自由に辨道の助けが出來て、さて年老つて本山へ出ると、授戒屋となつて、全國に引き廻されるとは、甚だ可かんことだ、ソレも規則となつては、猶更いかん、全體今の管長と云ふものや、本山眞首と云ふものを、無闇に年老つたものに限ると云ふ風のあるのが、大變な誤りだ、管長や眞首は、年老りに限るとしてあるから、自然飾り物となつて了ふのだ、これは、一つ改良するがよい、今の若い連中も、其中に管長や眞首になることであらうから、今の中にこんな制度を改良して、をかん、と、大きに困るであらうよ。

古橋の底

明治三十四年、禪師東北巡教中、陸中盛岡の近郷紫波郡遠山正音寺の御親化を濟ませられ、て大巻の金高寺に入らんとす。時恰も晩秋晴雨定まらざるに加へて山間の道程なれば、特に正音寺所藏の轎に乗輿を請ふげだし、此の轎はもと同寺に於て總持寺輪番の際仕用せしものなれば、至りて壯麗をきわむと雖、幾年月を累ねたる今日なれば、少しく蟲賊の犯す所あるが上に、事急速のあひだに屬せしを以て僅かに修理を加へて、これを用ゆ、用意既に成りて禪師乗駕發錫せらる。道路險惡、使丁漸やく歩行すること、約二十丁餘にして、遽然轎の底脱けて禪師正に泥中に墜落せんとして、漸やくまぬかる、隨侍せるもの恐れて語なし、時に禪師破顔一笑、左右をかへりみ、詠せられていはく、

古橋の底のぬけると死ぬるとは

ところえらばず時をさらはず

家内安全の祈禱

人あり、一日禪師の左右に拜問して曰く、家内安全の祈禱法ありや、またなしやと、禪師答へ

られて曰く、善哉問ふこと、アルトモく、むかしの人の作りける家内安全子孫繁昌の陀羅尼と云ふものがある、と直ちに高唱せられていはく、

唵ニコく腹立つまいぞや婆娑訶

どうだ、ありがたい陀羅尼ではないか、お前達も、毎日飯前に一度つゝ、このだらに讀みさへすれば、屹度家内が安全て子孫は繁昌するぞよ、と

足跡のたへぬ寺

往年東北巡教の途次、花巻の楊本松山寺の特請に赴ひかる、同寺はさるとし祝融の災にかかり、悉皆灰燼に歸し、其再建中に屬したりせば、禪師に寺號額の揮毫を請ふ、禪師需めに應じて大書筆紙に松山寺の三字を書して與へらる、たまく孩提の兒これを踏みて足跡を附す、寺主これをみて、快からず、煩慮のあまり、禪師に閱を請ふ、禪師一閱して曰く、ヨシくわれこれに祈禱して與ふべしと、紙をのべ毫を點して曰く、

足跡のたへぬ寺こそめてたけれ

歸依する人の多ければなり

濱名橋上の遊戯

禪師、かつて遠州白須賀町藏法寺の助化として同寺に赴く、途中有名なる濱名橋を過ぐ、時寒風凛烈六花繽紛たり、禪師、車を橋上に駐めしめ、侍僧、驢庵を顧み、破顔一番出来たり出来たり、東海道三宿の狂歌は出来たり、

風あらむ雪まひさかの苦みを

宿にかへりて誰にしらすか

かくて橋を通りて荒井町の本陣旅宿に憩ふ、時に下婢の梅ヶ谷然たるもの出て、茶を備へ、禪師戯れて曰く

ほどもわるいが女もわるい

その癖も膳はよくすへる

釋迦の賛

某居士あり、曾て釋迦出山の圖を携へ來りて、其賛を懇請す、禪師直に筆を染められて曰く、あなたは悉多太子か、わしや知らねども、三千年の其の昔し、衆生濟度に御難儀をなされしことは、身にしみて、いくら末世の僧徒でも、聞いては安氣に眠られず、況してや、あなたの光りにて、着るも食ふのも伽藍まで穢して、あつてえらい顔、道心なさはなんとまあ、さ

ぞや呆れてござんせう、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛、

* * * * *

○ある人の書きし達磨大師の像に

よくかたい目玉ひとつが肝要ぢや

鼻耳眉は申分なし

○布袋和尚のかたに

あたらしき袋買ふには錢はなし

ひまにまかせてほころびを縫ふ

○苦翁寺

苔をみて翁の墓ぞしられける

幾年へしと人に問はじや

○紅葉

千歳ふる松もつひにはかるいなり

なにおしむべき秋の紅葉波

○二日市宿大丸屋

大丸に小丸四人泊りけり精進料理に

こまるとぞいふ

○太宰府

わかきより思ひつくしの神なれば

ぬかつきあかむあせいづるまで

○岩船につく

雨ふれど波もだやかに風たしず

誰も小言をいは船につく

○粟島

海あれて船もかよはず米盡きて

飢へたる色はあは島の人

○

手水場はなみに破れて繩しばり

なはにとりつきひる波の上

○

ぬつたりと汽車にのつたりこれよりは

ねたりあきたりほらを吹いたり

○

なみくの波にあらさる大波を

かぶる姿はなに、新潟

○柱杖拂子賛

世の中の悪魔外道をたゝきだし

心のちりをはらはんと欲す

三松稿

三松稿

明治三十四年九月十八日諸嶽山總持寺祝國開堂法語

山門

門是通暢 何曾擇人 十方解脫 大地無塵

佛殿

誰謂乾屎橛 面前相好奇 眞眞無彼此 證髓莫爲龜

伽藍

不違佛勅 賞罰要嚴 老骨無力 呵護莫嫌

祖堂

莫謂東西隔 法界是全身 任佗骨髓話 只見栢樹親

兩尊

八十又加一 災後任難當 唯懷再造志 伏願垂餘光

據室

不能容八萬四千衆 不得舉二十餘員規 只隨分攝棒喝無私

山門疏

百事唯爲法 盡力救山門 空中有文彩 網維舌上翻

鴻道舊疏

知舊在天外 遙辱傾心優 齡也俱耆耄 木馬遇石牛

近門疏

打鼓爲舞 柳楊任陀 陽燄渴鹿 天淨風過

門末疏

萬波總入海 流水溯源頭 推輓同心力 祖宗回復秋

拈衣

非金襴布帛 非故紙荷衣 披奉如來教 隨緣度群機

登座

三松稿

當仁不讓 何論高低 獨立無伴 正令全提

拈香

南閩浮提大日本帝國 石川縣能登國鳳至郡櫛比村 諸嶽山總持寺
新住持傳法沙門 穆山僅焚寶香 端為祝延
今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬歲 陛下欽願 皇德普布中外億兆 寶
祚與天壤無窮

這香奉為曹洞宗太祖本山開祖弘德圓明國師二世大和尚以上酬慈恩
伏惟 黑漆崑崙明於日月 物我俱忘朗於天地

這香為五院開基諸大和尚及獨住第一世 伏惟 五葉繁茂 蔭涼東
亞 芳苾隨風 薰徹沙界

這香為本地結界檀那定賢律師 以酬變土洪大之恩 寔以 施心清
淨 受心空寂 盡未來際 住護法願

這香山川丘壑鬧市寒村 行住坐臥包藏衣裡須臾不離 今日 手拈

出 拋下爐中 供養本師宗參廿三世安宿禪老師 以酬針筭不入之
深恩

上堂鈞語

有人道得一句法界量滅 未免春夢說吉凶 今日有照了非夢之真覺
底 不妨道將一句來

提綱

龜鶴双峯綠 秋天孤月明 若是作家漢則一見不再見 如慶喜見阿
閼佛國 何疑着之有 諸嶽山 曩罹舞馬災 伽藍未修 假設道場
欲使老衲行晋山大法會 老衲從來磊苴懶慵 行業無一可取 隨緣
移錫 遂陞此座 赧面汗背 雖然今日於此假設大道場 開堂演法
十方來儀 龍蛇混同 迺衲之所最歡也 所以者何 如來自菩提樹
下至法華會上 皆是水月道場空花萬行 都庶非假設道場 經曰諸
佛淨土亂起亂滅 須知假是非假假即是實 實是非實實即是假假實

不二 夢覺一如 故道拈來親用得妙也

記得南州帥南平鐘王 雅聞曹山大師有道 盡禮致之不赴 但書大

梅偈曰 摧殘枯不顧 郢人何得苦追尋 附使贈之 遂不赴 老衲

今日與曹山大師全相反 慚愧不慚 然亦有意旨 諸人知否 夏宜

葛不宜裘 冬宜裘不宜葛 伏以衆慈久立珍重

當晚小參鈞語

閉却咽喉唇吻有通消息底 不妨呈一機來

提綱

第一句薦得爲佛祖爲師，第二句薦得爲人天爲師，第三句薦得自救不了，萬松曰第一句薦得猶是萬松兒孫南泉云威音以前行道猶是王老師兒孫下去，今日諸人者第幾句薦得，諸方說是說非說迷說悟，真理原則追香尋氣，文字言語區區異妄想，孜孜弄空華舌頭雖長，胸中不穩，曲救安心風，敢誇鼻孔高，佛祖真實家風，將拂地，忍俊不禁，適問此事，如聾如啞，苦哉苦

哉老衲今日八十有餘，纔餘一死，殘喘逼且夕，羸羸弱弱，無有領衆徒之力，雖然，因緣難免，來污高臺，何幸尙焉，龍衆聚來親見諸大德，宗門通機，在干此時，試問第一句如何會去，能所依正向上向下久遠今時，明暗偏正，迷悟事理等，第二第三，爲何用廢，縱道盡大地一口吞盡了，猶是妄想知覺習氣，老衲不惜眉毛，試注脚第一句去，看看手裡拂子，依舊拂蚊，咄，伏乞久立珍重

獨住第一世香語

殺活臨機時惡辣風 悲心慈德亘虛空 鯤乎吐水跳溟北 颯也攬雲

過海東 噴

梧桐一葉窓前落 纔聽秋聲意不窮

大乘開山香語

大乘佛法易而難 自作聯芳寂々看 夜冷水寒魚不食 空垂釣月一

絲竿

二代尊香語

我々唱罷洋々唱 劫外知音五五人 滿地兒孫滿天曲 調高白雪又陽春

太祖國師香語

悉見三千開活眼 崑崙夜裏變成就 曹溪洞水俱吞盡 吐出扶桑第一宗 嘆

萬里秋風秋雨夕 龕頭闌寂只聞蛩

對真上堂法語

古日時節因緣佛性顯現 時節既至何以佛性不顯現 若謂知見未開 自己光明蓋天蓋地 由何佛現不顯現 蓋為信得不及修得不及也 於是乎 古人信修多年如嚼鐵牛 撥草瞻風 參師問法 五年七年 乃至二三十年 始到此地 佛性顯現 大活現成 頓發大慈悲心 拖泥滯水 七通八達 無有不是 諸大德如何認得去

記得 太祖國師曰 黑漆崑崙夜裏走 通曰未在更道 國師曰 逢茶喫茶逢飯喫飯 今日有人 曰未在更道 老衲對人道 拋身捨命 四海分衛 只箇一事 伏以衆慈久立珍重

初登能本山

衰躬誤去逢他選 半死無功一臭囊 携筇獨對能山月

戶崎正覺寺戒會中偶作

秋霖漠々太無情 七日尸羅一日晴 雲霧滿湖舟不見 泥深渡口絕人行

丹霞燒佛圖

佛是心田汚 況於一切生 能除生佛惑 始識法身清 吐 飢來喫飯困來睡 可笑丹霞老賊情

偶作

秋雨秋風天寂々 靜論真俗好隨時 能通兩祖甚深意 文字語言皆

總持

三松稿

洞雲寺中興十八世布能得山和尚廿三回忌法語

得山得水物光豐行 布門開法界通這裏 誰能知此道洞雲深處入圓

融 映

莫言二十三年後 古今蒼々萬里空

法雲普蓋禪師二七日香語

五十年前穿被友 總持補席亦因緣 法雲散處猶餘影 普蓋東方第

一天

寒梅一二清香發 幽谷雪深鶯未遷

○

錫掛雲中脚濯流 是非不到意悠々 猿乎鶴也非吾伴 七尺單前愛

鐵牛

○

莫言寂寞又荒蕪 月照山間露似珠 雲衲滿牀薪水足 舊觀誰羨聳

天衢

自七尾至能本山作次均

道情老去與山深 七尾灣頭路隔心 群島逐帆人似鳥 數峯連浦古

如今 三松鶴瘦舊巢冷 諸嶽月孤清影沈 災後休言門寂寞 幾多

子院倚蒼岑

原 韻

路入能州山更深 此心隨境々隨心 總持門有通真俗 三樹松無

阻古今 鶴夢巢寒雲寂々 龍燈影冷月沈々 任佗天下攀緣熟

諸嶽秋高侍碧岑(日置默仙)

提唱坐禪用心記及三根坐禪說畢賦似

禪說三根最老婆 用心針藥療沈痾 耳孫傳語者人誤 莫向樵夫唱

權歌

三松稿

涅槃忌法語

圓明寂照實玄々 無上涅槃入耳喧 淡々法身人識否 梅翻香氣滿
公園

第五聯隊第二大隊雪中行軍凍死者

追吊會大施餓鬼法語

寒風吹雪舞山巔 兵力何堪敵此天 二百餘人唯爲國 凍魂欺玉入
黃泉

後土御門天皇四百回忌法語

石川縣能登國鹿島郡酒井保洞谷山永光寺明治三十四年九月二十七
日迄十月三日修行尸羅會
後土御門天皇四百回忌大法會 先是 住持白嚴力生 憂道路險隘
車馬難通起工修築 長四百八十間幅三間 往々甃石防水 加石橋
四所 疊磴五十二級 又樹石門高二間 費財千六百餘金 縣廳持

給四百金 其不足者募化於有志補之 是以 遠近老若 輒得詣道
場沾法雨 可謂其勞偉矣 此日使老衲拈報恩心香 報恩心香如何
教陳

至尊昔日賜皇綸 聖德煌々護法神 洞谷如今開險

虛空藏菩薩贊

虛空是牀 萬物含藏 隨願成就 明珠劒光

世尊出山像

入山出山 終不離山 山即是佛 佛即是山

次太祖國師遺偈韵

定中知否不生人 八十年來礙世塵 三省深慚無一取 隨緣但欲轉
玄輪

總持寺偶作

古寺存眞法 山中自有箴 鐘驚村野夢 鼓動坐禪心 蟋蟀啼閑砌

樵夫息靜林 從來文字外 獨識總持深

能州永光寺滿戒上堂法語

洞谷山頭千樹曬錦 永光寺畔百鳥調箏 自性靈明 實相無相 五

老峯前白雲鎖 邑知湖上薄霧生 戒鉢戒儀總在這裡 誰持來誰犯

去 皮膚脫落盡唯有一真實

記得明峯哲禪師入室 山問曰不慕諸聖不重已靈如何會 師曰夜行

勿踏白不石即是水 今日有人道不慕諸聖不重已靈汝如何會 對佗

曰 外現是聲聞內秘菩薩行 路 永光寺畔一天新

成願寺聯

耕德山頭 生三草二木之異種 成願寺畔 開七覺八正之妙華

題高祖大師真蹟後

文文句句 皮肉巖然 莫謂過去 神光射天

高祖大遠忌法語

渾身無着絕追尋 照破東天是此心 心水漲空流派遠 源頭孰識越溪深

題守隨氏過去帳

守分隨時世業存 克家偏報祖先恩 更留薄牒明名實 時祭慇懃勗

子孫

五百羅漢拜請語

迎得天台五百僧 一燈無盡到千燈 紹隆佛寶嚴如在 金環衣鉢自

繩々

海中出現觀音大士贊

現出波瀾上 浮沈快樂身 度生無盡願 刹々又塵々

釋迦孔子老子三聖圖

人倫雖道貴 不識入虛空 無解脫門頭 塵中接智愚

越後北蒲原郡田上村安國山東龍寺完戒上堂法語

安國山聳 兀坐端然 東龍在田 潛行密用 無相心地 春天風暖
 無作戒躰 山花欲燃 誰傳誰受 超越三際 聯綿古今 到這裡
 會則頭上安頭 不會則暗夜失燈 本具自性戒 畢竟如何認得去
 隨流認得性 無喜亦無憂

偶作

混俗隱於市 淤泥何染蓮 惟欣知者少 心月自團圓 紫衣猿鶴笑
 甘作利名僧 六趣與車轉 火中一點水 作驢仍作馬 非聖亦非凡
 點々從佗喚 對人口一絨 堪笑苑林路 紛々車馬蹤 不關門外事
 咫尺碧山重

橫濱西有寺入佛供養塔婆銘

新迎佛祖 急放光明 睜睜此地 松綠風清

法雲普蓋禪師像贊

二十餘年住總持 法雲普蓋大慈悲 不關世上閑言語 別有生涯孰

得知

長崎控訴院判事春日君墓表

君諱肅。初稱慶之進。春日氏。父曰快道。母某氏。陸前仙臺人也。明治九年。八月。遊司法省法學校。修佛蘭西法。苦學八年。為法律學士。任判事。經神戶及東京始審裁判所。轉東京及大阪控訴院。一旦辭職為辯護士。再起為長崎控訴院判事。自從七位。累陞至正六位。君深歸依三寶。暇則參滴水峨山兩師。研鑽不懈。拈笑會之起。實為首唱。又為大阪慈惠會理事。以身投之。去歲四月。患肺。就醫於須磨。今卜五月。其友齋藏某。往訪問其遺囑。君徐開口曰。吾不能起矣。得由子請穆山禪師之文以志墓。我願足矣。不復言佗。後三日。從容賦國風一首。脫然而逝。以安政二年十二月生。以明治三十四年六月一日歿。享年四十七。葬仙臺東昌寺。諡曰丹竈院肅翁仙居士。子三人。曰敏。曰剛。曰毅。頃者。某以遺囑。謁余文。君弟永岳。曾受故剃度。尋歿。今又有此請。曷堪感愴。因不辭表其墓。

題大雄山最乘寺圖史

銀樓被擁老杉松 警覺村々徐夜鐘
道了神靈呵護境 大雄山頂瑞
烟濃

法雲普蓋禪師秉炬香語

成雲作雨潤山川 七十餘年蓋一天
全體元來無出沒 翻然超越這
那邊

潛行密々 機用綿々

棒喝喚來 頓踏翻覺岸岸

篋笠携去 親參得愚稱禪

入佛入魔戾天躍淵

游泳大龍海中 攫雲拂水

宴坐大雄山上 排霧破烟

總是無非耕海藏打開之心田

終窺洞源諸嶽頂上 欲振流派統一毒拳

任佗諸堂舞馬災 却成檀信擴充之緣

上來禪師生滅法外之活三昧 今日轉身一路如何布宣

妙應通身無向背 古菱花不染蠟妍

法雲普蓋禪師中陰法語

老海花發歲寒天 雪虐風饕太可憐
賴有靈根深入地 枝頭結子自
妍妍 噴

滴階半夜空山雨 古寺秋生似鼓絃

高祖像開光

等閑一木 脫落身心 直鼻橫眼 光照古今

太祖像開光

虛空裡走 八角磨盤 無眼無鼻 照破心肝

兩祖翁同時開光

八角磨盤脫落身 元非一二是同心 光明照破三千界 兩尊共奉祖堂新

賀黃梅山栽松院尸羅會圓成

栽得心田一寸松 黃梅山裡翠陰濃 戒雷震處風濤冷 廣潤群生活老龍

善光寺

莫言三國傳來佛 空劫以前淨法身 性界周融圓滿月 千江有水影皆真

春雪二首

一日紛飛雲 天花滿四山 觸目如淨土 端坐出塵寰 一時銀世界 極目白皚々 宛似豪家富 天晴消却來

偶作

體饜明月眼 枯木作龍吟 此道人難識 切看自己心

羅漢寺

嶮 穿去徑纔通 五百應真如現空 描不成還畫何得 晚鐘聲遠伴

松風

太宰府

逆境何憂遇謫還 忠魂一到動高天 千年德昭神如在 萬樹梅花老轉妍

嚴島

仙境曾經戰血羶 神威益耀幾千年 山容海色詞難述 朱閣銀樓映水鮮

薦小松宮殿下尊靈法語

氣吞富岳占三島 功極勳高五十年 玉馬金鞭皆是夢 袈裟曾絡好因緣

次長谷川國手見寄韵聊述懷以酬

水作心兮雲作姿 纔餘暖氣不知疲 隨風欲倒西還北 誤被人天稱導師

達磨贊

一雙碧眼 福智二嚴 教外宗旨 無風颺帆

眼藏開講語

正法元來不覆藏 山河大地露堂堂 百花落盡催新綠 杜宇聲々轉斷腸

偶作三首

空論文字理 四鉢不省行 口心相違背 茫茫過一生 騷客敢無好俗人還不憎 如明鏡對物 誰識我心澄 書生真可慙 快活徒勞神 泡沫身如夢 不知死作隣

法語

高祖曰四念住是住處 三皈依是依止也 山僧不然 四誓願是住處

不變異處是依止也 依止即是住處 住處即是依止 依止住處且置何物住有何物 依止若有物住有物依止則能所判然 非真住處作麼生是真住處 消息分明無所尋

自唐津至博多途上

對馬如雲影欲消 築南潮接北韓潮 怪巖奇石名難得 處々青山各自嬌

泉岳寺戰捷祈禱會法語

法界廓然無罣碍 從來般若一真空 暴風驟雨隨時起 期得東天日出紅

征露戰死者追吊施餓鬼會香語

千魄萬魂皆佛性 心行異處地隔天 看來三界尋無跡 甘露微妙救得全

可睡齋

山不敢高 已得海內 寺雖聊完 足養道人

自畫觀音贊

觀音即是我 我即是觀音 彼此更無二 大悲唯一心

今茲夏與露有事 冲禎介君 奉內諭 深入滿洲 欲

有為事 覺 銃殺於露領 哈爾賓其火壯藏君 編索

歌其事 遂及乎老衲 因賦此慰之 甲秋立秋

破鐵路壞鐵橋 斃敵手恨不銷 所學只忠孝 一死酬聖朝

西有禪話終

明治三十八年四月九日印刷
明治三十八年四月十三日發行

西有禪話與附

定價金貳十五錢

編輯者 橫井見明

發行人 今村金治郎

東京市芝區露月町十八番地

印刷所 株式會社 英舍

東京市京橋區四軒屋町廿六七番地

不許複製

發行所 東京市芝區露月町 鴻盟社

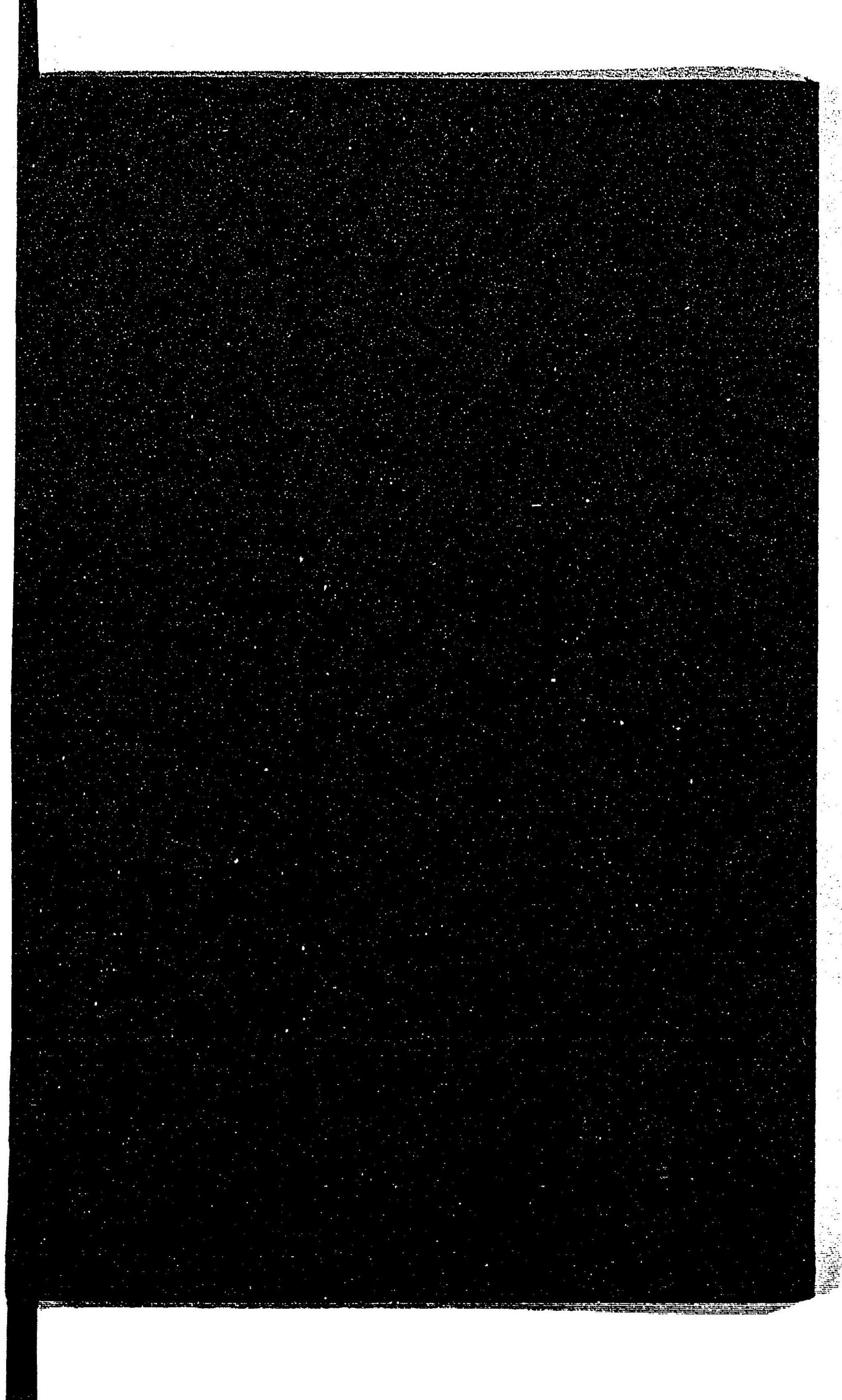
(目書略賣發社盟鴻)

正法眼藏 <small>和語梯合本</small> 全一册 定價金三十五錢 郵稅金四錢	正法眼藏顯開事考 全一册 定價金二十錢 郵稅金二錢	正法眼藏開解 全二册 再版 近刻	正法眼藏私記會本 全二册 定價金五圓 小包料金三十錢也	正法眼藏抄 全二册 定價金五圓 小包料金三十錢也	正法眼藏涉典續貂 全六册 定價金參圓 小包料金二十錢也	正法眼藏辨註 全廿二册 定價金七圓 小包料金四十錢也	正法眼藏藏 <small>(本山版)全一册</small> 定價金壹圓十五錢 小包料金十五錢	正法眼藏藏 <small>(本山版)全廿二册</small> 定價金七圓五十錢 小包料金三十錢
冠學永平學道用心集 全一册 定價金二十五錢 郵稅金四錢	荒田隨筆 全二册 定價金八十錢 郵稅金八錢	重曹洞五位顯訣 全一册 定價金三十錢 郵稅金四錢	洞法眼格正 全一册 定價金三十五錢 郵稅金四錢	冠五位顯訣元字脚 全一册 定價金四十五錢 郵稅金四錢	正法眼藏辨道話卷私記會本 全一册 定價金十五錢 郵稅金二錢	正法眼藏出家功德卷私記 全一册 定價金十二錢 郵稅金二錢	正法眼藏 <small>道心卷 三時樂卷 略依三寶卷</small> 私記合冊 全一册 定價金十二錢 郵稅金二錢	正法眼藏行 <small>事卷</small> 私記合本 全一册 定價金二十四錢 郵稅金四錢

(目書略賣發社盟鴻)

佛祖正傳禪戒抄講話	全一册	定價金 七十錢	修證義聞解	全一册	定價金 四十錢
禪戒訓蒙	全一册	定價金 二十錢	信心銘夜塘水講義	全一册	定價金 七十錢
禪戒法話	全一册	定價金 十五錢	普觀坐禪義筌要	全一册	定價金 十二錢
禪學三要	全一册	定價金 四十錢	現曹洞宗制規大全	全一册	定價金 貳圓也
論曲禪話	全一册	定價金 二十錢	曹洞宗說教大全	全一册	定價金 壹圓五十錢
禪學活問答	全一册	定價金 二十五錢	曹洞宗講演集	全二册	定價金 貳圓五十錢
禪機と哲學	全一册	定價金 二十五錢	永平寺真景	全一册	定價金 十五錢
禪宗史要	全一册	定價金 十五錢	曹洞宗教海新湖	全一册	定價金 三十五錢
修證義筌要	全一册	定價金 十五錢	新四節引道抄	全一册	定價金 三十錢

179
1795





019779-000-9

79-545

西有禪話

西有 瑾英/著

M38.4

ABG-0593



